

グランドゼロ

GROUND
ZERO JCF

97 秋

2013年9月26日 発行

- 福島支援
たぐさんの一歩を形に
- 第98次訪問団&スタディツアー



JCF

ブライト・オクジャワ（1924～1979）

訳・神谷さだ子

あなたに私の人生について書こう、それ以上のものはない
あなたに私の人生について書こう、たんに個人的な

私はどのようにこの世界を見て、いかに愛し、反抗するか
この人生の何から何までも

暮らしの細部やぐらぐらする最後の昇降段をも
最期の窓からずっと手招きしながら

それは私にとって果てしなく、甘いものと思われる
あたかも遠い道が再び私の前に開かれるように

あたかもそれは私にとって……白樺の紅葉した葉、

模様のついた赤いななかまどの葉、そして黒い樹皮の櫨
私の気まぐれで朝霧が巻き上がる

私の幸せな気まぐれに9月という時がある

グランドゼロ 97 秋

GROUND ZERO JCF

目次

	震災から2年半	<鎌田寛>	6
福島支援	2013年夏保養プロジェクト		10
たくさんの一歩を形に	保養のお手伝いを通じて考えたこと	<小宅春樹>	12
	みんなのデータサイト	<浜崎竜太郎>	14
	市民科学研究成果発表会及び「ちくりん舎」見学	<岡崎友哉>	17
	信頼を得る測定を目指して	<高橋一馬>	18
	高木仁三郎市民科学基金	<中澤啓子>	20
	食品放射能測定結果(2013年5月~9月)		23
	長野県測定所連絡会報告	<中澤啓子>	28
	震災と共に生き、 あらたな生き方を模索する人々との出会い	<佐藤直>	30
	震災から2年半、人々に蓄積する疲労	<横内香苗>	40
	子どもたちの明日、未来のために、 一緒に行動しませんか!	<高橋美加子>	44
第98次訪問団& スタディツアー	『Hiroshima Nagasaki and Fukushima』	<小池保寛>	48
	心電計セットアップ	<藤牧久芳>	50
	測定は続けることが大切	<神谷さだ子>	53
	事故から27年のベラルーシ訪問	<藤田健>	53
連載&お知らせ	ドイツマインツの脱原発便り	<近江まどか>	60
	連載随筆「小さな一人」	<宮尾 彰>	62
	母から伝わる食卓		64
	モスクワ便り		65
	振替用紙のメッセージから		66
	ありがとうございました!		68
	「福島原発被災者支援募金」のお願い		71
	Здравствуй те! (事務局広場)		72
	カルチャーレビュー		76
	インフォメーション		78

福島支援

たくさんの歩を形に



子どもサミット参加者宿舎「松本青年の家」の前で福島からの母子とJCFスタッフ

子ども達のはじける元気をそのままに解き放つ。
子ども達のふさいだ気持ちを静かに見守る。
子ども達にふりかかる災禍を防護したい。
私達ができることは、ほんの少し、そして一步一步。

震災から二年半

鎌田 實 (JCF理事長)



松本・Mウィングで阿部長野県知事（前列中央）と鎌田理事長

被災地に通い続けています。

先週も3日間、南相馬の仮設の絆診療所で「心と身体の健康の話」をして、参加して下さった方を昼ご飯にご招待しました。仮設住宅でも簡単作れる昼ご飯を教えながら、参加者に食べて頂いたのです。ここで暮らす人達は、いつ仮設から出る事ができるかわからず希望が見えてこない中、ここでの生活が長くなり精神的にかなり参ってきています。

仮設住宅で生活する患者さんの所も廻ってきました。脳卒中の後遺症で悩んでいる方などは仮設住宅での生活はとも辛いのです。

9月9日から3日間、「ドリームフェスティバルin会津」に医師として同行しました。全国から集まった車椅子の方やがんの患者さん330人と一緒に、東北を忘れないで応援するツアーです。もう2年半経ったから大丈夫と思わず、被災地のことを応援し続けることが大事だと思います。

この夏は長野県が音頭をとってくれて、長野県内各地のいくつものボランティア団体が福島の子どものための夏休みのサマーキャンプを企画運営しました。

JCFもお母さんと子ども達合計33人を迎えました。子ども達は草の上でゴロゴロしたり水遊びをしたり、木島知

草さんと指人形で遊んだり、楽しい時間を過ごしました。ポランティアのクラウンからバルーンアートや皿回しも教わり、クラウンになれそうなほど上達した子もいました。

お忙しい阿部知事も、福島のお母さん達とのデイスカッションに参加して下さいました。

お母さん達からは「福島の子どもたちを守るために今回のような保養はとても大事で、感謝している」という発言があり、また、

「保養という言葉を使うとー私たちは気にしないけれどもー気にするお母さんや市町村もあって、参加しづらくなる」という声も聞かせてもらいました。

「保養」に参加した結果として、子ども達が少しでも福島から離れ、例えば草の上でゴロゴロしたり、水遊びをしたり、安心して外遊びできることが大事です。

子ども達の新陳代謝は活発なので、チエルノブイリでは毎年汚染地の子ども達に24日間の保養を行ってきました。

日本では24日間連続での保養はなかなか難しいけれど、1年間合わせて24日間くらい福島の外に出ている時期があり、その間、内部被曝や外部被曝を受けなければ、万一子ども達が汚染された期間があっても、排泄されて綺麗になつていく。できるだけ慎重に子どもたちを守ってあげることが大切です。

保養に参加したあるお母さんから、こんな質問も頂きました。

「子どもへの影響が大きいとわかってはいますが、2歳児の娘をどうやって守ってあげればいいか、正直本当に不安です。移住できるその時まで保養でつなぐしかないのですが。」

『24日』という日数は本当に足し算で大丈夫でしょうか？」

たとえ内部被曝しても、多くの子どもたちは1カ月くらいでセシウムを排泄して正常化します。足し算でも効果があると考えていいと思います。これを確認するためにはできれば年2回の体内被曝の測定が大事です。

JCFは保養と放射能の見える化、検診のスピードアップを訴えてきました。それは22年間チエルノブイリに医師団を送り続けて、チエルノブイリで学んできたことです。

福島県のひらた中央病院の約2万例の体内被曝の検診結果を見ると、15歳以下の子ども達からは今年になってから1人も内部被曝は検出されていません。

300ベクレル/ボディー以下がND（検出限界値）ですので、ゼロとは言い切れないのですが……。そこがお母さん達の心配なところですね。そこでひらた中央病院では3台目のホールボディーカウンターを11月頃導入予定です。

からだ全体で50ベクレルまで微量なセシウムが測定可能になります。しかも、今まで測れなかった4歳以下の子どもも測定できるようになります。

できるだけ安全なものを食べ、そしてチャンスがあれば保養等で県外に出て、年2回体内被曝を測定して安心を得ることが大事です。

いくつもの分断がおきています。

ディスカッションの中でもあるお母さんから、自分達は子どもを連れて県外に出たいと思っっているのですが、夫は全く意見が違い、「心配するな。福島県が安全と言っているんだから余計なことを考えるな」と、意見が分かれると話されていました。

子どもを連れて福島県を出た人と福島県に残らざるを得なかった人たちとの心の分断。夫と妻の意見の分断。お年寄り達は放射能は見えないので、そんなに心配するな、早くふるさとに帰りたいと言い、若い人達は幼い子どもを福島で育てるのはとても難しいと思う、若者とお年寄り達の分断もおきています。20キロゾーン内に住んでいたために補償を厚くもらっている人と、家が20キロゾーンの外なので、同じように苦労をしているのに、補償をわずかしかもらえない人との分断もおきています。何とかこんな哀しい

分断の溝を少しでも埋めて、あたたかな福島を取り戻せたらと、応援を続けています。

お母さん達とお話していて、阿部知事から、

『保養』という言葉を使わなければもつと沢山の人が県外へ出易くなり、今回のような企画に参加できるなら、『スポーツ合宿』とか『交流会』という名にして、子ども達に心配なく遊んでもらう事業にしてもいい』

という提案もありました。名前にこだわらなくても結果が大事だからと僕も賛成しました。お母さん達からも拍手がわきました。「自分達は保養という名前でも参加してとても良かったので、保養という名前がつくと参加しにくい親子のために、ネーミングを変えるのはとてもありがたい」というお母さん達の声でした。

甲状腺がんについての質問がたくさん出ました。福島の県民健康管理センターによる約17万人の検診が終わった時点で、18人の小児甲状腺がんが診断されています（8月20日発表）。100万人に1人か2人と言われていた甲状腺がんが、約1万人に1人発生しています。これはチェルノブイリの放射能汚染地域と同じ比率です。それでも県民健康調査の委員会のドクターは福島第一原発の事故と関係ないと言っていると新聞に載っていました。

関係あるかないかは慎重に検討するしかありません。関

係があるかもしれないと考えて甲状腺検査の質の向上やスピードアップを図ることが子ども達の命を守るためには必要なことです。

今回の検診後18人以外に、さらに25人の甲状腺がんの疑いのある子どもがいることもわかってきました。現在確定診断をしている最中ですので、おそらく甲状腺の細胞診で疑いが出たのだと思います。細胞診の検査は、甲状腺の場合、割合正確なことが多く、この25人もがんの可能性が高い。そうすると40人を超える子ども達が甲状腺がんになつている可能性もあります。

JCFは事故直後、放射能の見える化をするように強く訴えていました。県も国もなかなか重い腰をあげようとしなかつたので、自分達でせめて外部被曝だけでも測ろうとガラスバッジを福島の方々に付けてもらって放射能の見える化をしました。当時、甲状腺のヨウ素131の被曝測定をほとんどしていません。そのため福島県民がどのくらいヨウ素131被曝したかは全くわかりません。半減期が8日のため1カ月もたつとほとんど測定が不能になってしまい、今からでは想像もできないのです。だからこそ原発事故と福島の子どもの甲状腺がんの発生は関係ないと勝手に断定せずに、関係があるかもしれないと考えて検診のスピードアップを図るべきです。チェルノブイリでは甲状腺

機能低下症などの病気もたくさん出ていますから、血液の検査も必要だと考えます。繰り返しですが、検診の質のアップとスピードアップが必要だということです

ロシアとベラルーシとウクライナで約6千人の小児甲状腺がんが発生したとチェルノブイリフォーラムで報告されています。子どもの死亡は2006年の報告書によると15名。甲状腺がんはがんの中では予後のいいがんだと言われていますが、やはり亡くなっている子もいるということを考えると、できるだけ早く検診をすすめ、早期発見早期治療が必要です。

JCFは信州大学小児科と諏訪中央病院の協力で、福島の子どもの検診の窓口となり、費用を支援して実施していることをお母さん達にも伝えました。

JCFはこれからも国の宝の子どもたちの命を守るために、福島のお母さんや地元の様々なボランティアの方々と協力し合いながら福島支援に取り組んでいきます。

最後になりましたが、今回のイベントに協力して下さいました方々に心から感謝をいたします。

23日はMウィングで子どもサミット。折りしも雨模様で、お天気配分に恵まれた日程でした。

木島知草さんの指人形にひきこまれ、クラウンさん達から皿回しを習ったり、子ども達は室内でも楽しんでいました。

ホールの中ではお母さん達と鎌田先生が白熱教室のような質疑応答をしました。

健康不安や家族関係の問題など、原発事故がいかに福島のお母さん達を苦しめているか、伺えます。阿部知事も参加してくださり、「保養」という言葉を使うと復興をうたう福島県からは参加しにくいなら、スポーツや文化交流を通して、福島の子も達や若者を長野県に呼ぶことを提案してくれました。今回はJCF主催として、初めての企画でした。今後も福島と共に生きるために工夫しながら保養事業に取り組んでいきたいと思ひます。



木島知草さんの人形劇にひきこまれる子ども達



クラウンと皿回し

☆ 2013 年夏保養プロジェクト

8月21日～25日、福島県から子ども達と保護者のお母さん方、33人を松本に招待しました。

22日のアルプス公園では、ドリームコースターが大人気。炎天下にもかかわらず、子ども達は疲れ知らずで走り回っていました。古民家では、有賀ふく江さん、Teamめとぼの協力を得て、焼きたてのピザ、おにぎりの昼食でした。お腹いっぱいと言いながら、流しそうめんが始まると最下流にはそうめんが来ない程の盛況ぶり。スイカ割りのスイカは地元波田の農家さんからプレゼント、とびっきりの甘さに大歓声！ちびっ子パワー全開の一日でした。



アルプス公園のドリームコースター



流しそうめん、上手に掬えました！



木陰でスイカ割りに挑戦

保養のお手伝いを通じて考えたこと



アルプス公園で流しそうめんに大喜び！

小宅春樹
(子ども信州ネット事務局)



ウェルカムパーティーで演奏する小宅さん（左端）

私は郡山市出身です。震災によって信州に移住したわけではありませんが。以前は東京で消防士をして、おりました。消防士という職業に疑問を持って辞職したわけではないのですが、自分が定年を迎える35年後までこの社会のシステムが果たして続くのだろうかという疑問を持ち続けてしまったため、あの時気づいていたのに何も行動を起こせなかった、と後で後悔するよりは動いてしまえとこのご時世公務員を辞めてしまいました。

そして信州の小諸で、これからの持続可能なライフスタイルのモデル作り、小諸エコビレッジに興味を抱き、その研修生として来たのがきっかけで移住しました。移住したのが2011年2月、そして一カ月後3・11が起きてしまいました。福島第一原発は未だに放射能を出し続け、汚染を拡大し続けています。

長野にいて自分にできることはないかと模索していたところ、小諸厚生病院の放射線技師、高橋和人さんが「放射線管理区域よりも線量の高いあんな場所に子どもたちを住まわせてはダメだ!!」とご自分の実家を提供してくださり、僕を管理人ということで常設の保養宿として開放することができました。

その活動の中、県内で色々な保養活動をされている方たちとネットワーク化の運びとなり、現在「子ども信州ネット

ト」の事務局をさせていた、だいております。

「子ども信州ネット」関連のいくつかの保養に関わり、JCFの保養では出発地からの引率をさせていた、だいたともあり、「保養」について感じたことを僭越ながらお話させていただきます。

そもそもこの「保養」の目的は放射能から子どもたちを遠ざけることが第一です。まずはじめにお話させていた、だきたいことは、受け入れ側も、お子さんのお父さんお母さんたちも、皆さんまずそれが一番の目的、だということ、です。みんな理解しているはずの当たり前のこと、ですが、受け入れる側もそれぞれ考え方が違い、どうしてもかわいそう、という気持ちから、なんでもしてあげたく、なってしまう、です。全国の色々なところで行われている保養の中には「上げ膳、据え膳、お土産付き」なんてものもある、です。そういった保養を経験している子どもたちは、保養とは、どんな、わがままも通り、何でも言うことをきいてもらえるところ、と勘違いしてしまっている場合、もあります。今回も若干、そ、ういった子どもたちを見受け、松本に向かうバスの中から僕にお小言を言われて、おりました。僕としましては現地でこの子どもたちが、どう、いう生活をしているかも多少、知っています。でも、なんでもわがまま、し放題はやはり筋が違、うと思、い、

いけないことはいけないとストレートに言うことに、して、います。

直接触れ合い話すと見えてくること、ですが、向こうの学校生活は意外なほど普通、です。普通であつてはいけない汚染がある環境なのに、普通の生活をさせて、しまつて、います。そんな中、でも子どもには子どもの社会、があります。みんなが体育をしている中、自分だけは毎、回見学、部活を休、んだりすると、まわりから揶揄、されることも、あります。その状況の中、なぜ自分、だけが、と子どもたちは、思、います。僕はそれを、させて、いるその子どもたちのお母さん、の方が、正しいと思、います。しかし、そ、う、い、つ、た、考、え、を、持、つ、お、母、さ、ん、は、圧、倒、的、に、少、ないのが現状、です。

保養に訪れたお母さんたちは、普段表に出すこと、さ、え、で、き、ない不安をお互いに、言、い、合、つ、た、り、し、て、い、ま、す。

そ、う、い、つ、た、現、状、が、あ、る、以、上、可、能、な、限、り、保、養、は、続、け、て、い、かなければ、い、け、な、い、こ、と、だ、と、思、い、ま、す。お、互、い、に、長、く、継、続、し、て、い、け、る、保、養、の、あ、り、方、は、試、行、錯、誤、し、て、い、く、必、要、は、あ、り、ま、す、が、現、実、に、目、を、背、け、ず、地、に、足、つ、つ、て、尽、力、し、た、い、と、思、い、ま、す。

みんなのデータサイト

浜崎竜太郎

色々な測定所の放射能測定結果を、1つのサイトで検索して見ることができたら便利だと思いませんか？

これまでは、それぞれの測定所のデータは、基本的に各々の測定所のみで公開されていたので、いちいち各測定所のホームページにアクセスし、測定結果を回覧していました。これでは、せっかく全国にある80箇所近くの全国の市民測定所の測定結果が非常に限定的となってしまう。

●プロジェクト

また、多くの測定所では、測定結果の公開方法は、ただ測定日の順番で羅

列してある使いづらいフォーマットです。例えば、長野県で生産されたお米の測定結果はどうなのか？ という際に、検索をかけることは困難でした。

このように各市民放射能測定所の公開データは、統一されたデータベース化がなされず、測定結果の分類や解析も行われない状況でした。

そこで、有志の測定所が集まり、測定結果のデータサイトを一元化し、閲覧者が多様な検索条件で知りたい情報を得られるというインフラの整備を進めてきました。

プロジェクト名は、「市民放射能測定データサイト」（略称：みんなのデータサイト）。

●プロジェクトの設立経緯

「CRMS市民放射能測定所」は、2011年7月に任意団体として設立し、福島県を中心に10カ所の測定所で

測定が始まり、測定データを共通のデータベースに入力し、一般に公開してきました。

同じ頃、名古屋市の測定所「未来につながる東海ネット・市民放射能測定センター（Cラボ）」でも、測定データのデータベース化と、それをわかりやすく地図上に表示するシステムをつくりたいというアイデアが持ち上がっていました。

また「高木基金」では、2012年3月から放射能測定に関わる助成先や応募者による「研究交流会」を実施し、その交流会で「Cラボ」から市民放射能測定データベースを本格的に構築しようとの提案がありました。

これを受け、データベース化を先行していた「CRMS」と、各地の市民測定所のネットワークである「全国市民放射能測定所ネットワーク」に相談し、共同での「データサイト」立ち上げに向けて準備を進めてきました。

●プロジェクトの運営団体

参加団体・協力団体

特に、「CRMS」と、「Cラボ」、全国市民放射能測定所ネットワークの世話人である東京都の「こどもみらい測定所」、「認定NPO法人 高木仁三郎市民科学基金」は運営団体の中心になって進めてきました。

中心になる運営団体の他に、私たちJCF-Teamめとばを含めた有志の測定所が参加表明を行い、参画する参加団体とテクニカルな事で協力頂ける協力団体も運営に参加します。

運営団体は事業計画・予算、事業報告・決算から実現化に向けた指針、特に、システム担当のグループがデータベース・ソフトの開発、ウェブ担当のグループがダミーサイトや本番用の使いやすいサイトの制作、みんなのデータサイトの食品の分類、標準試料の作成などを担当しました。

慶応大学のWIDE PROJECTもサーバー提供で協力、また企業の方々の協力も得て、最終的に英語での翻訳も検討しています。

以上のように、みんなのデータサイト・プロジェクトは様々な方が協力している市民放射能測定所としては最大のプロジェクトです。

●データの信頼性について

複数の測定所の測定データを蓄積し、発信していくにあたっては、まず、それぞれの市民測定所の測定が、正確なものでなければなりません。この「データサイト」の立ち上げにあたり、参加する市民放射能測定所同士が測定技術について情報交換、意見交換を行い、測定精度の向上、また測定経験の共有を行ってきました。

参加する全ての測定団体に4つの濃度が異なる標準試料(信頼できる測定機

によって放射能物質の含有量を確認)を用いてクロスチェックを行いました。標準試料を各市民放射能測定所が測定し、結果のばらつきを統計的に評価して、一定範囲以内に収まっていることが確認できた測定機に関して、検査合格証が送られ、みんなのデータサイトに参画する事ができます。

これは測定機、測定者、測定環境の違いがあるなか、同じ標準試料を用いてどれだけ違いが出て、どれだけの違いを許すかという問題を統計学的に評価するという事です。私たち、Teamめとばは、この検査に合格しました。

●どんなサイトになるのか

2013年9月7日の「みんなのデータサイト」一般公開に向けて様々な調整を行っています。およそ20団体の測定所のこれまでの測定結果、そし

て今後の測定結果を一元化する事により、誰でも横断的にデータを閲覧できるといふサイトになります。特に、「使いやすい」にこだわったサイトになる事を一つの目的にしていますので、閲覧者が知りたい測定値に関して1ストップ検索で情報を得られるサイトとなつていると思います。

データは利用（解析）する事によつて統括的な情報となるので、誰にも使われないデータであつてはなりません。

市民団体の測定結果に関しては「みんなのデータサイト」、行政の測定結果に関しては、三重大学の奥村晴彦さんが作ったサイトで、厚生労働省の「食品中の放射性物質の検査結果について」のデータが、データ検索がかけられます。この2つのサイトのデータが誰でも利用できる有意義なデータとして機能する事が期待されます。

● Teamめとばと

みんなのデータサイト

Teamめとばは2012年2月に設立しました。2012年3月25日に名古屋で高木基金主催の測定所の連絡会に参加し、そこで各測定所のデータサイト一元化に関する提案がなされました。

また2012年8月の長野県の測定所連絡会の議題としても、データサイトを統一することにより、各測定所の精度を確保するためトップダウン型で測定スキルの向上に繋がるので有益だ、という議論もなされました。

しかし、それ以降、この測定データサイトの実現化について明確な指針はなく、2013年1月14日に東京で高木基金主催の測定所連絡会で実現化に向けた議論を行い、みんなのデータサイトプロジェクトはキックオフしました。Teamめとばは1月後半に参加

団体としては2番目に標準試料のクロスチェックを行いました。

そして3月17日に東京で全国の測定所向けに説明会を行い、運営団体、協力団体、参加団体など連携をはかり、ようやく一般公開できる状況になりました。

その間、幾度となく会議に参加し、無数のメールで実現化に向けた具体的な詰めを行ってきました。Teamめとばとしては、これまで通り測定結果をホームページ上に公開していきま

す。そして、その結果を同時にみんなのデータサイトでも公開していきま

みんなのデータサイト

<http://www.minnanods.net/>

高木仁三郎市民科学基金

市民科学研究成果発表会及び「ちくりん舎」見学

岡崎 友哉

2013年7月6日、高木仁三郎市民科学基金の研究成果発表会に参加し、高木基金から助成を受けた団体の成果発表会を聞きました。15分の発表と15分の質疑応答で1団体当り約30分の発表時間でした。

6月30日に第一回目の成果発表会があり、今回参加したのは第二回目の発表会でした。全部で13団体が発表し、放射能測定、遺伝子組み換え作物、アイヌ民族の権利回復についてなど多様な発表内容でした。

放射能測定の話では、放射能がでた食品や土壌についての話が印象に残りました。福島の原因事故由来の汚染が未だに海や陸に残っており、除染は長い道のりであることを再認識しま

した。自分たちの活動にプラスアルファとなる話もあり、特に海鮮物については原発の事故の影響を知る上で欠かせない測定対象だと思います。Teamめとばの測定室にもエアコンが設置されたので、なま物の測定を今後していくことができたらなと思っていきます。

他には、給食の測定の話がありました。行政との壁は厚く、なかなか測定に漕ぎ着けないケースがあるようですが、親にとっては学校給食の安全性は非常に気になるだけに、給食の測定は大きな意義があるものと言えます。

放射能測定以外の話では、遺伝子組み換え作物が自生し道端に生えていること、作付されている大豆の多くが遺伝子組み換え大豆であるという話が印象に残りました。大豆以外にも遺伝子組み換えナタネが野生化しているという話があり、放射能汚染以外にも気づくべき事柄はたくさんあることに気づ



市民科学研究成果発表会に参加した Teamめとばの岡崎さん（左）高橋さん

きました。視野を広く持つことの大切さを学びました。

7月7日はゲルマニウム半導体測定器「Eシンチレータ測定器がある「ちくりん舎」の見学と、午後は参加者での懇談会が行われました。ちくりん舎ではフランスのNGO「アクロ」の協力の下で、エネルギー分解能が高いゲルマニウム半導体検出器を備えており、少量の検体量で精密な核種の測定が可能です。測定装置が複数あるので、クロスチェックが容易に行える環境でもあります。測定検体の持ち込みで料金を徴収する形式で、これはTeamめとばのやり方と同じでした。

ただ、建物や周りの環境整備はこれらのため、測定できる環境を作るまでの道のりが大変そうでした。測定所の周りは木や畑や竹林に囲まれ、同じ東京とは思えないくらい自然で豊かでした。しかし、近くにエコセメント工場

があり、この工場から排出される煙や飛灰により環境が汚染されているそうです。セメントに放射能低汚染灰が混ぜられており、汚染が数値化できるところから事業は国のモデル事業となっているようです。自然豊かな山でも汚染されているのが現状のようです。

交流会では、日本全国の測定所の測定結果を共有するプロジェクトが計画されているという話があり、各測定所のデータが1つのホームページで参照できるそうです。私達も参加できればと思っています。

今回の高木基金での発表会・交流会で、またまた自分が勉強不足であると感じましたが、自分たちのしている活動に活かせそうなアイデアの収穫もあり、大変有意義な二日間でした。このような交流を通じて放射能測定の技術を更に取り上げられるようにしていきたいと思えます。

信頼を得る測定を目指して

高橋 一馬

今回初めて放射線測定を行っている他の方々の話を聞くことができました。

まずその方々の意識の高さに驚かされ、また同時に福島とは遠く離れた全国各地の方々が本気で放射能について考え、行動しているというのをうれしく感じました。（*高橋さんの実家は須賀川）

1日目は高木基金から助成を受けている研究の発表で様々な視点からの研究の話を聞くことができとても新鮮でした。

また他の放射線測定所の発表では様々な参考になる話を聞くことができました。

例えば、北海道の測定所の方々は様々な種類の魚について測定を行い、その中でもタラでよく放射能が検出されるという報告があったり、東京の測定所の方々は柑橘類で放射能がよく検出されるので、それについて重点的に様々な検体を測定してみたりと、皆さん工夫をして自主測定を行い、いろいろな視点から放射性物質を追いかけていました。自分達もこの様な手法はもちろん、特にその姿勢を見習い自分達の測定に生かしていきたいと思いました。

2日目は午前中はちくりん舎さんで、その測定環境の見学をさせて貰い、初めてゲルマニウム測定器を見ることができました。また自分にとって最もためになったのが午後からの各測定所の方々の懇親会でした。

その中でもちくりん舎さんの立ち上げを支援してくれたフランスのNGO

「ACRO」の代表の方のお話は驚かされることばかりでした。

なぜかというところ、そのACROという組織は政府からも信頼されていて、政府への影響力も持つというのです。日本の市民活動とは規模も信頼性も大きく違うのだなと感じ、自分達日本の市民活動が目指す理想の形の近い所にいるのではないかと思いました。

市民活動においてのネックというのは、主張、考えを市民が持つていても学術的にそれを世間に納得させるための専門的な活動がしにくいという点にあると思います。しかし、彼らACROはその専門的な部分を引き受け、中立の立場で信頼できる調査を行うという分業的な形が出来上がっていて、これは効率の良い理想の形の一つではないかと思うのです。このシステムのおかげで市民が自分達の考えを主張していくためのハードルが下がり、さらに

議論は活発になっていき、政府へ市民

の考えがさらに影響を与えていくことになるでしょう。

ACROの代表の方の言葉ですが、「政府が専門的な顧問機関を持つように、市民にも専門機関が必要なのだ」ということでした。

しかし、ACROが政府からも信頼されるようになるまでには大変な苦労があったようです。徹底的な精度の品質管理、第三者機関からのチェック、データ・コメントの信頼性の保持などを長い間継続してきた結果がこの信頼性に繋がってきたのだとおっしゃっていました。

自分達も彼らを見習っていく上で、まずはこの信頼を得ていくことが最も大切なのではないかと感じました。そしてこれは、1人1人の地道な日頃の活動での心がけから始まっていくものなのだと思います。

高木仁三郎市民科学基金

中澤啓子（事務局）

6月30日・7月6日両日に、高木仁三郎市民科学基金で助成を受けている市民団体の研究成果発表会がありました。

2日間あわせて24件の発表でしたが、私たちは7月6日に行われた13団体の発表を聞きました。放射能汚染問題、原発廃炉問題、食品遺伝子組み換え問題、放射能汚染ゴミ焼却灰および産業廃棄物最終処分による環境汚染問題など幅広い取り組みについての発表がありました。

高木基金は高木仁三郎さんの遺言により2001年設立されました。高木さんの思いや市民科学基金設立の経緯を振り返りながら、発表会を聞いた感想をお伝えします。

高木仁三郎さんは東大理学部化学科卒業後、原子力発電所で燃料ペレット一つを燃やすと、人間一人の1年分の電気を賄うことができる原子力エネルギーを素晴らしいと思ひ、原子核研究にすすみました。しかし核燃料を燃や

した後の灰は放射能を持ち、数万人の人間を殺せる殺人兵器となること・放射能の寿命も長いことに驚愕し、原子力は人類と共存できないと思うに至ります。そして原子力産業に関わった体験から「原子力産業の科学的基盤というのとはなんと不確かなものだろうか！」と実感するようになります。高木さんは市民の側の懸念を共有したいと思ひ、悩んだ末に専門家のコミュニケーションを離れ、市民としての科学者、な

いしは、科学者としての市民として、市民とともに作業をしようと決意します。政府の原子力政策について自由な見地からの分析・提言を行う為、原子力

業界から独立したシンクタンク・原子力資料情報室を設立し、そこへ自分たちが思っていた原発の最悪シナリオに近いスリーマイル島の事故があり、単に根拠のない危惧をいつているのではないと確信しました。

その後、プルトニウム利用の危険性を世界に広く知らせた科学的、社会的貢献によりライト・ライブリフッド賞を受賞しました。しかし日本の官僚を変えないと原子力政策は変わらないと実感し、官僚になる手前の若い人の教育、社会自身が必要としている科学者を自分たちで育てるシステム作りを提唱。ライブリフッドの賞金と多くの方々の支援をもとに高木学校をたちあげ、市民の立場から問題に取り組むことのできる市民科学者を育成してきました。

高木さんは2000年にお亡くなりになりましたが、生前「高木基金の構想とわが意向」という覚書にご自身の遺産をもとに、趣旨に賛同する方から



高木仁三郎さん

のカンパを募り、今後も次の世代の市民学者を育成、支援してほしいと希望されていました。遺志を受け、弁護士河合弘之氏や高木久仁子さんを中心に2001年高木基金が設立されました。市民科学を志す市民やグループへの調査研究・研修の助成を今でも継続され今回の発表会に至っています。

JCFが2000年発行したブックレット『チエルノブイリからの伝言』には、高木さんが病を押して「これは僕の遺言と思ってください」との

言葉を添えて応えてくださったインタビュー記事があります。

大学を辞め市民科学者となった経緯を、「大学での科学者は実験室に入って測定器と試験管とPCを使えば直接市民と関わらなくとも業績が上がっていく。その過程で多くの研究者は市民としての視点を失っていくことが多い。いつも科学者である自分と市民としての自分という視点を持っていることが大事である。また業界や政治的利益によらない情報公開が大事であり、原子力資料情報室を立ち上げたのも、自分自身がそういうことがちゃんとできる人間になりたいと思つて関わってきたのだ」と話しておられます。

私も今回高木さんの色々な本を少しずつ読み、読めば、読むほどに高木さんに対して人としての尊敬の念が深まりました。

そんな高木さんの遺志を継いだ13団体の、市民の立場に立った発表は、地

方の本当にその場所の住民が必要としている問題をテーマにしたものが多い。しかしそれは限定されている住民ばかりではなく、遺伝子問題や環境影響問題など未来の人類にとっても、生命に関わる重要な研究であると思いましたが。情報公開されなければ自分にとっては知らないで過ごしてきたことが多い、驚きと反省とでいっぱいでした。

一部の権力者、企業の利益追求でのみ成り立ってきた事象を、市民レベルから改革していく一歩が発表から感じ取れました。経済も大事、しかし命をつなぐことはもっと大事。次世代に受け渡していくのに知らなかったでは済まされない問題に、もっと目を向けなければならぬと思いました。

そしてJCFの測定所でもTeamめとばと一緒に、何か一つ研究できる体制をつくっていかれたらと思います。

(次ページに高木仁三郎さん略歴年表掲載)

高木仁三郎さん略歴 (参考『市民科学者として生きる』岩波新書 『脱原発の20年』原子力資料情報室)

1938	7月18日、群馬県前橋市に開業医の子として生まれる
1945	広島、長崎原爆投下
1951	世界初の原子力発電 (アメリカ)
1957	群馬県立前橋高等学校を卒業し東京大学理科一類に入学
1961	東京大学理学部化学科を卒業 (核化学) 日本原子力事業 (NAIG) に入社し NAIG 総合研究所核化学研究室に勤務
1963	日本初の原子力発電
1965	7月、東京大学原子核研究所助手となり宇宙核化学を研究 朝日学術奨励金を得たプロジェクトでアルミニウム 26 の検出に従事
1969	7月、東京都立大学助教授に就任 (理学部化学教室) 三里塚闘争にかかわり始める
1972	5月から独ハイデルベルクのマックス・プランク核物理研究所客員研究員 (73年5月まで)
1973	8月末をもって東京都立大学を退職
1974	プルトニウム問題を考える自主グループ「プルトニウム研究会」を組織
1975	「プルトニウム毒性の考察」(岩波書店『科学』5月号) 8月、京都で「反原発全国集会」 9月、原子力資料情報室が設立、専従世話人となる
1976	内部告発による美浜原発1号の燃料棒折損事故を追及
1978	反原発運動全国連絡会『反原発新聞』創刊、編集長を務める (88年まで)
1979	3月28日、米スリーマイル島原発事故
1980	◇スリーマイル島原発事故の衝撃 [編著] (社会思想社)
1981	◇プルトニウムの恐怖 (岩波新書) / 危機の科学 (朝日選書)
1983	◇核時代を生きる (講談社現代新書)
1984	◇核に滅ぶか? [前田哲男との対談] 径書房
1985	9月、日比谷公会堂「三里塚・東峰裁判完全勝利をめざす集会」実行委員長
1986	4月26日、チェルノブイリ原発事故
1987	原子力資料情報室の代表に就任
1988	4月24日の反原発運動全国集会・事務局長 脱原発法制定運動を提起。
1991	原子力資料情報室とグリーンピース・インターナショナル共催「国際プルトニウム会議」
1992	多田謡子反権力人権賞を受賞
1993	1月、「脱プルトニウム宣言」科学技術庁前でハンスト
1995	11月、国際 MOX 燃料評価 (IMA) プロジェクトを開始 (研究代表を務める) イーハトーブ賞を受賞。
1997	12月3日、長崎被爆者手帳友の会平和賞を受賞 12月8日、スウェーデンでライト・ライブリッド賞を受賞
1998	1月、「オルタナティブな科学者を育てる」高木学校の呼びかけ 7月、大腸ガンが発覚、8月末日をもって原子力資料情報室代表を退任 12月、高木学校第1回連続講座で「プルトニウムと市民」を講演
1999	原子力資料情報室が特定非営利活動法人の認証を受ける
2000	4月28日、青森地裁での核燃料サイクル施設許可取消訴訟で証言 10月8日午前0時55分、東京都中央区の聖路加国際病院で永眠 (享年62歳)

JCF-Team めとば食品等放射能測定結果（測定結果公表可のデータのみ）

2013年5月～9月

No.	測定日	試料名	産地	重量 (g)	測定時間 (分)	Cs137 測定値 (Bq/kg)	Cs134 測定値 (Bq/kg)	備考
624	5月11日	砂	長野県松本市	1423	5400	7.83 ± 2.51	5.48 ± 3.94	
626	5月13日	土壌	千葉県柏市	1682	3600	19.32 ± 4.19	7.26 ± 3.72	
627	5月14日	土壌	千葉県柏市	1786	3600	29.63 ± 5.97	14.67 ± 5.26	
628	5月13日	じゃがいも	鹿児島県	957	18000	ND<2.98	ND<3.34	
629	5月14日	土壌	群馬県前橋市	780	3600	177.72 ± 33.08	97.53 ± 20.37	
630	5月14日	土壌	群馬県前橋市	708	3600	130.10 ± 24.65	69.11 ± 15.93	
631	5月14日	土壌	群馬県前橋市	562	3600	356.48 ± 65.60	190.17 ± 37.39	
632	5月15日	土壌	群馬県前橋市	689	3600	242.25 ± 44.85	132.03 ± 25.02	
633	5月15日	土壌	群馬県前橋市	684	3600	856.73 ± 155.38	454.28 ± 83.07	
634	5月17日	落ち葉	群馬県前橋市	233	3600	342.39 ± 64.90	189.14 ± 37.86	

NDとは検出限界値未満のことで、ND<の右の数字が検出限界値です。検出限界とは有為な放射能を検出することのできる下限値で、有為な放射能とは、統計的に見て、バックグラウンド値と明らかに異なる放射能が検出されたと判断できるということです（単位：Bq/kg）。放射能濃度と検出限界には誤差（±の右の数字）があります。*同じNo.のデータが重複しているものは、検査時間などを変えて再検査したデータです。

食品衛生法上の基準値（厚生労働省 医薬食品局食品安全部 平成24年4月1日施行）

放射性セシウム	飲料水	10 Bq/kg
	牛乳	50 Bq/kg
	一般食品	100 Bq/kg
	乳児用食品	50 Bq/kg

661	6月7日	白米	長野県松本市	1086	14400	ND<2.55	ND<2.83	
662	6月11日	みそ	長野県諏訪市	997	54000	ND<1.45	ND<1.64	
663	6月11日	もやし	長野県安曇野市	1025	18000	ND<2.40	ND<2.67	
664	6月18日	わかめ(乾燥)	三陸	479	18000	ND<4.85	ND<5.43	
665	6月17日	あさり	静岡県駿河湾	886	10800	ND<3.50	ND<3.90	むき身とゆで汁を測定
666	6月12日	大豆	北海道・宮城県	1039	18000	ND<2.49	ND<2.76	水煮で加工
667	6月13日	レッドキャベツ	愛知県	711	14400	ND<3.79	ND<4.23	
668	6月14日	粉茶	茨城県坂東市	941	14400	ND<2.94	ND<3.32	
669	6月19日	土壌	長野県松本市	1267	3600	ND<7.22	ND<7.84	
670	6月18日	はちみつ	長野県北安曇郡	1207	54000	ND<1.23	ND<1.36	
671	6月21日	赤貝	静岡県駿河湾	883	10800	ND<3.57	ND<3.99	むき身とゆで汁を測定
672	6月19日	ピーマン	宮城県	841	18000	ND<2.96	ND<3.33	
673	6月20日	長ネギ	鳥取県	803	14400	ND<3.39	ND<3.79	
674	6月24日	ゆで干し大根	国産	613	18000	ND<4.04	ND<4.61	大根、人参、昆布入り
675	6月20日	しめじ	長野県安曇野市	546	57600	ND<2.41	ND<2.72	
677	6月25日	大根	長野県東筑摩郡	922	54000	ND<1.59	ND<1.79	
678	6月24日	土壌	長野県北安曇郡	1124	3600	ND<9.12	ND<9.73	
679	6月25日	生しょうが	高知県	954	16200	ND<2.77	ND<3.13	
680	6月26日	紫たまねぎ	兵庫県	1045	18000	ND<2.43	ND<2.71	
681	7月9日	干しいたけ	三重県	217	18000	ND<10.7	ND<12.2	
682	7月18日	煮干し	国内	666	18000	ND<3.71	ND<4.23	
683	6月27日	土壌	長野県東筑摩郡	1020	7200	ND<5.67	ND<6.18	
684	7月23日	海水塩	日本・メキシコ・オーストラリア	1217	16200	ND<2.17	ND<2.40	日本(7%)メキシコ・オーストラリア(93%)

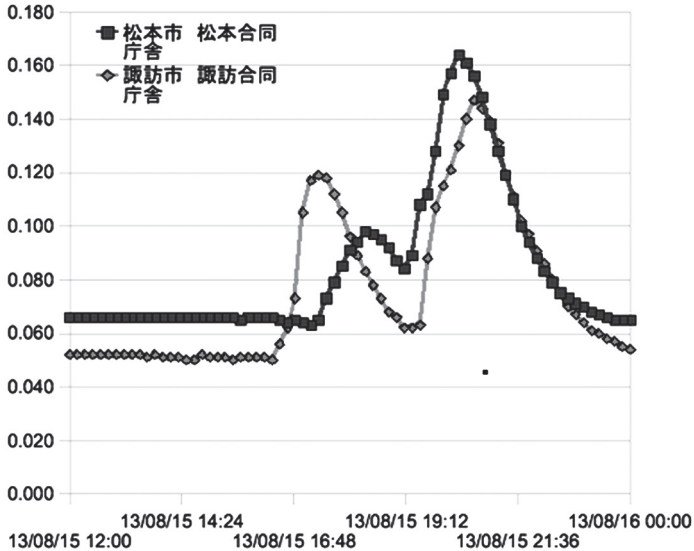
No.	測定日	試料名	産地	重量 (g)	測定時間 (分)	Cs137 測定値 (Bq/kg)	Cs134 測定値 (Bq/kg)	備考
635	5月16日	アスパラガス	長野県東筑摩郡	789	14400	ND<3.90	ND<4.39	
636	5月20日	大根の葉	長野県東筑摩郡	400	14400	ND<7.31	ND<8.31	
637	5月16日	レタス	長野県	668	7200	ND<6.32	ND<7.09	
638	5月17日	えのき	長野県安曇野市	852	14400	ND<3.62	ND<4.07	
640	5月21日	ほうれん草	長野県松本市	649	18000	ND<4.27	ND<4.83	
641	5月23日	土壌	長野県長野市	1476	3600	101.89±18.98	51.84±11.20	
642	5月23日	土壌	長野県長野市	1156	7200	42.62±8.13	21.76±4.59	
646	5月21日	苔	長野県長野市	261	3600	2889.13±523.07	1574.94±286.80	
647	5月22日	ごぼう	長野県	874	18000	ND<3.14	ND<3.53	
648	5月24日	本しめじ	長野県	985	14400	ND<3.22	ND<3.63	
649	5月27日	ワイン	長野県松本市	724	14400	ND<4.20	ND<4.69	
650	5月28日	にんじん	千葉県	969	18000	ND<2.92	ND<3.27	
651	5月29日	小松菜	愛知県	1021	18000	ND<2.82	ND<3.16	
652	5月29日	いのしし肉	山梨県北杜市	1001	5400	ND<5.30	ND<5.93	
653	5月30日	白菜	長野県松本市	758	14400	ND<4.08	ND<4.62	
654	5月30日	ハンガリー ハクミツ	ハンガリー	860	57600	ND<1.52	ND<1.70	
655	5月31日	くき茶	埼玉県狭山市	1008	14400	ND<2.78	ND<3.10	
656	6月3日	ホールコーン	北海道	880	18000	ND<3.17	ND<3.53	
657	6月5日	ぬか	長野県松本市	626	54000	ND<2.35	ND<2.72	
658	6月4日	突こんにゃく	群馬県	986	12600	ND<2.96	ND<3.30	
659	6月6日	もも	山梨県甲府市	619	21600	ND<3.47	ND<3.91	
660	6月5日	いか	ペルー	1013	18000	ND<2.45	ND<2.75	

713	7月24日	土壌	群馬県前橋市	623	3600	430±78.5	221±41.1	
714	7月25日	土壌	群馬県前橋市	647	3600	227±41.9	114±23.2	
715	7月25日	じゃがいも	宮城県石巻市	684	61200	ND<1.89	ND<2.13	
717	7月26日	土壌	群馬県前橋市	674	3600	792±144	396±72.3	
718	7月26日	土壌	群馬県前橋市	277	3600	244±46.2	122±28.4	
719	7月26日	土壌	京都府長岡市	1777	3600	ND<5.4	ND<5.89	
726	8月1日	白すりごま	大阪府寝屋川市	712	10800	ND<4.53	ND<5.09	産地は加工地
727	8月6日	とうもろこし	長野県安曇野市	740	19800	ND<3.14	ND<3.54	可食部のみを測定
729	8月5日	土壌	長野県安曇野市	1145	9000	ND<5.12	ND<5.51	
730	8月5日	土壌	長野県安曇野市	965	6000	ND<7.13	ND<7.69	
731	8月7日	土壌	長野県松本市	1201	1080	ND<4.69	ND<5.06	
732	8月5日	土壌	千葉県市川市	1259	3600	182±33.5	90.8±17.1	
734	8月9日	海岸砂	愛知県知多郡	1060	14400	ND<3.87	ND<4.36	海水を含んだ泥状で測定
735	8月20日	切り干し大根	宮城県	454	18000	ND<5.58	ND<6.49	乾燥状態
736	9月5日	花かつお	国産	503	18000	ND<4.78	ND<5.42	
737	8月9日	乾燥梅	国産	601	10800	ND<5.36	ND<6.04	
739	8月26日	大根	長野県松本市	606	16200	ND<4.05	ND<4.55	
740	8月27日	干椎草戻し汁	三重県	905	14400	ND<3.04	ND<3.39	
741	8月28日	玉ねぎ	北海道	801	16200	ND<3.18	ND<3.54	
742	8月28日	スパゲッティ	栃木県	101	61200	ND<11.6	ND<13.1	
743	8月30日	たまねぎ	長野県松本市	705	9000	ND<4.79	ND<5.41	
744	9月2日	にんじん	長野県松本市	915	7200	ND<4.51	ND<5.07	
745	9月2日	じゃがいも	長野県松本市	944	7200	ND<4.35	ND<4.88	
746	9月5日	かぼちゃ	長野県松本市	801	54000	ND<1.76	ND<1.99	
750	9月5日	ごぼう	群馬県	569	6000	ND<7.29	ND<8.21	
751	9月5日	にんじん	北海道	878	14400	ND<3.12	ND<3.52	

No.	測定日	試料名	産地	重量 (g)	測定時間 (分)	Cs137 測定値 (Bq/kg)	Cs134 測定値 (Bq/kg)	備考
685	6月27日	梅	長野県松本市	734	54000	ND<1.89	ND<2.14	産地は購入地
686	6月28日	土壌	福島県郡山市	794	1800	11400±2050	5980±1080	
687	7月1日	とうがん	静岡県	703	18000	ND<3.37	ND<3.79	
688	7月3日	スッキー二	長野県	956	18000	ND<2.62	ND<2.93	
689	7月4日	ひじき	韓国	497	17100	ND<4.73	ND<5.31	採取地(韓国)戻した水(新潟県魚沼市)
690	7月5日	土壌	群馬県前橋市	702	3600	1210±218	607±110	
691	7月5日	土壌	群馬県前橋市	831	3600	130±24.3	63.3±13.8	
692	7月5日	土壌	群馬県前橋市	971	3600	124±23.1	65.7±12.7	
693	7月8日	土壌	千葉県印西市	895	10800	227±41.2	118±21.8	除染2週間後
694	7月8日	なめたけ	長野県	1051	14400	ND<2.63	ND<2.96	
695	7月29日	しょう油	不明	1056	10800	ND<3.12	ND<3.53	
696	7月30日	米粉	長野県	791	18000	ND<3.01	ND<3.39	
697	7月24日	凍り豆腐粉	国産	501	18000	ND<4.76	ND<5.32	
698	7月10日	チンゲン菜	福島県	875	16200	ND<2.95	ND<3.33	
699	7月12日	麦茶	国産	485	18000	ND<4.73	ND<5.35	湯で抽出していない
700	7月11日	チンゲン菜	長野県佐久市	607	16200	ND<4.12	ND<4.64	
701	7月16日	なると	日本、アメリカ、タイ、オーストラリア	1066	16200	ND<2.42	ND<2.67	
702	7月17日	なす	栃木県	842	18000	ND<2.89	ND<3.25	
703	7月19日	りんご	長野県安曇野市	554	19800	ND<4.00	ND<4.48	
709	8月7日	粉茶	茨城県坂東市	426	64800	23.5±4.40	12.0±3.60	

2013-8-15 諏訪市 松本市空間線量率

<http://radioactivity.nsr.go.jp/map/ja/download.html>



2、ホットスポットファインダー (GPS 運動型の空間線量率自動記録システム)

今回ゲストとしてお呼びした神奈川県東林間測定所の高岡章夫さんは、タブレットPCと小型の超高感度 γ 線検出器を持ち歩いて計測するだけで、GPSで特定された現在地から移動経路ごとに、全国地図情報上に、空間線量率マップを自動作成できるホットスポットファインダー (HSF) を持参してデモンストレーションしてくれました。実際高濃度の線源を近づけると瞬時にスペクトルが上がり、遠ざけると下がります。「放射能は見えないので、震災から2年たった今は意識が薄くなっている。地図にして目で見えるようにし再認識してもらいたい」とおっしゃっていました。

測定所連絡会は毎回色々なことが話し合われるので、私たちも学びながら、共有できる話題は報告していきたいと思えます。

長野県測定所連絡会報告

中澤 啓子（事務局）

今回も興味深い話題が2件ありました。

- 1、8月15日の松本市の空間線量率上昇について
- 2、移動測定に向いているホットスポットファインダーについて

1、8月15日諏訪市・松本市の空間線量率が約 $0.1\mu\text{Sv/h}$ 急上昇し、諏訪、松本に避難、移動した方の中で話題になっていた件について一ノ瀬修一さん（信州放射能ラボ）が早速調査してくれました。一ノ瀬さんによると、文科省の土壤の放射性物質降下密度とその場所の1m空間線量率を計測した際の漸近線は $27,600\text{Bq/m}^2$ にて、 $0.1\mu\text{Sv/h}$ 上昇に注目し、これらの資料や自社のゲルマにて8/15日に降った雨水を測定。その時は $0.1\mu\text{Sv/h}$ の考察には至りませんでした。

しかしその後の考察により下記のプロセスを推定

- ・雨水に約 300Bq/Kg の半減期約30分の放射性物質が含まれていた
- ・降雨量100mmに達すると、平方メートルあたり、3万ベクレルとなった
- ・これより空間線量率は $0.1\mu\text{Sv/h}$ 上昇した
- ・核種の半減期は約30分であり、ピークを迎えた後は急激に減衰した
- ・雨がやみ数時間経過後、空間線量率は、降雨前と同じ値に戻った
- ・この半減期約30分の放射性物質は、ラドンガス (Rn-222) の崩壊核種（娘核種）である、放射性ビスマス214 (Bi-214) や放射性鉛214 (Pb-214) である

後日8/31日に降った雨水を測定（実際に 226Bq/Kg の Bi-214 、 Pb-214 のみが含まれていた）結果8/15の諏訪市で117mm降った豪雨時の区間線量率が $0.1\mu\text{Sv/h}$ 急上昇したメカニズムの上記仮説とほぼ整合したと説明報告してくれました。

*ラドン-222

無色、無味、無臭で、ウランの崩壊系列中のラジウムから生成され、空気中にある自然放射性物質。

震災と共に生き、 あらたな生き方を模索する人々との出会い

佐藤 直 (Team めとば)



南相馬除染研究所で左から、箱崎さん、佐藤さん、谷田部さん

方々に会い、2年半が経過した現在、先の長いこの問題とどのように付き合っているのかを知ることである。

ホットスポットファイナダー測定を体験

初日は新幹線で郡山市に入った。交通量も多く広大な都市だ。タクシートの運転手さんに聞くと、東北では仙台に次いで2番目に人口が多く、30万人が暮らしているという。我々は、郡山市内のお母さんたちのグループ「安全・安心・アクションin郡山(3a)」を尋ねた。その日、室蘭工大の河内邦夫先生が3aの事務所を拠点に市内の空間線量を測定中であると耳にしたからだ。

到着すると、カレースープとおにぎりで優しく歓迎していただいた。スープには3aで販売する西日本の野菜がたくさん入っていて、かぼちゃやサツマイモの甘みが美味しく、なにより気持ちがあたたかかった。

2013年9月25日、神谷事務局長のガラスバッジ回収に同行して、私は生まれて初めて福島を訪れた。Teamめとばメンバーとしての私の目的は2つ。これまで文章や話で聞いてきた現場の姿を、実際に目と肌で見得てくること。もう一つは、現地で放射能と向き合っている

ホットスポットファイナダーと名付けられた測定器は、自転車を改造した手作り感にあふれるものだった。その名前前から、かっちりとした洗練された市販品を想像していた私は、その姿にいささか戸惑った。システムの基本発想はシンプル。正確に内部時計を合わせたGPSとサーベイメータを載せて、自転車で街中を走る。それぞれの機器は常時測定

を行い、データは別々にメモリされる。そしてパソコン上で同期をとり、マップ上に座標と空間線量を描画する。

ものづくりが好きな人間なら、これなら自分たちでも作れるじゃないか、一瞬そう思うかもしれない。私はそう感じた直後にはっとした。我々も、力不足ながら放射能に向きあう中で、放射線のマップ化が頭を過ぎらなかつたわけではない。自分たちにはできなかったのだ。

放射能が拡散した。それならば、データを取り可視化せねばならない。これは環境工学を研究してこられた河内先生にとつては、ごく当たり前で確信をもった答えだったのだろう。先生は、その確信をこれまでの経験と技術で即座に形にした。教えられることは大きい。

測定器をもういちどよく見てみる。機械類には防水と耐衝撃が施され、体力がない方でも、低速で安定して走れるように電動アシスト自転車である。十分に測定点密度を取るため、目安としてのスピードメーターが付いている。風にあおられても見やすいよう、地図の取付けも工夫したそうだ。GPSは、故障に備えて予備が載せられている。

ボランティアの方々もすごい。3aでお会いした二人の男性は連日、丸一日をかけて郡山市内をくまなく回り続けている。先生は2011年の秋にマップを作りはじめてから、マシンはもとより自転車の走るコースひとつとっても、

測定者の方々と一緒に積み上げてこられた。そんなノウハウの厚みを強く感じた。これは生きている測定器なのだ。

我々は、実際に測定も体験させていただいた。ヘルメットをかぶり自転車に乗り込んだ私は、1km四方ほどの区間を任せられた。その区間の路地を1本ずつ走り、地図を塗りつぶしていくのだ。ゆつくりと路地を走りだす。天気は曇りだったが、風がすがすがしく、見知らぬ土地を走るのはわくわくした。一瞬、ここが放射能に汚されてしまった街だということを忘れた。

最初、この街ではやけに工事が多いなと思つていった。自転車で回つてみると数軒に1軒は土木工事をしている。看板には、普段見慣れない「除染作業中」の



ホットスポットファインダーを積んだ自転車で測定する佐藤さん

文字。私は『除染』の現場を初めて目にした。道路やコンクリートの駐車場は、高圧洗浄機を使ってこびりついた放射性物質を流す。最近では、洗浄と同時に吸引する方式も主流だそう。庭のある家では、芝生を剥ぎ表土を削り取っている。仮置き場は、いまだ全く足りていないままだ。剥ぎとった表土は、各戸の土地から持ち出せないために、庭の隅に集積しておくか、庭を掘り起こして深部に埋めるしかない。

作業員はおそらく現地の人ばかりではないだろう。皆、放射能を扱っているというようなシリアスな表情ではなく、淡々と作業を進めている。

一方、除染の現場の周りには人々の日常があった。買物に出かける人、下校途中の子どもたち。当たり前前の生活であるが、少なからず、被災地に来ているという心持ちの私にとっては、除染と生活とが同居した風景に違和感を感じた。

2時間ほど自転車を走らせ、あと路地数本を残すというところで雨が降り始め、私は事務所に戻った。河内先生は早速GPSとサーベイメータをパソコンに繋ぎ、汚染マップとして印刷してくれた。自分が走った道が正確に色塗られていて感慨深い。寄り道や、迷ってうろちた跡も丸裸だ。ざっと見渡しても、明らかに線量が高い路地やスポット

トが赤色で示され、局所的に点任していることがわかる。自転車で測定することで、車では小回りのきかない細い路地も緻密に測定ができ、身近なホットスポットの発見につながる。生活に寄り添った、ミクロな汚染マップだ。

私が味わった違和感は、ここ郡山に住む人々が一番感じていることだろう。私達は、この街で普通に生活しているのだろうか。庭を掘り起こされて、除染の効果はあるのだろうか。数年も経てば元に戻ってしまわないか。子どもたちの未来は安全なのか。

震災以降、私が尊敬する科学者の方々はとにかくデータを収集した。あらゆるバイアスのかからない、客観的なデータを集め、有意なものとして可視化し、公表した。河内先生も、定期的に郡山の線量を測り続けている。市内の空間線量は年々下がっていつているようだ。

データは時に残酷でもあるが、志有る人々の手に渡れば強靱な武器になる。「安心・安全・アクション」をうたう3a。彼女らは郡山に住み続けることと、子どもたちを守ることを同時に決意した。放射能測定や保養情報の提供をする傍ら、河内先生のマップづくりもサポートしている。

『見えない不安』がマップによって可視化される。避けるべきホットスポットも明確になり、除染を優先すべき地区もわかる。なにより、早くこのマップを真っ青にする、

そんな前向きな気持ちにさせてくれる。

街にでて自転車を漕ぐという、具体的なアクションによる放射能の可視化が、安心をもたらし安全への希望を与える。

農地は人とともに生きる

翌日、我々は谷田部さんの運転で中通りと浜通りを分ける阿武隈山地を越え、国道12号線で南相馬市へと向かった。地理に疎い私は、福島県の地域圏を、内陸から会津、中通り、浜通り、と三つに分けることすら、この日の朝の天気予報で知った。自家用車で我々を案内してくれた谷田部裕子さんが、助手席の私に、南相馬の民俗文化を講義してくれた。

相馬地方は、名前に馬が付くように人と馬とが共に生きてきた地域だ。鎌倉時代より農家が馬を飼育し、年に一度、野馬追と呼ばれる祭りが現代まで続けられてきた。野馬追祭りでは、乗馬の競争や、騎馬上での旗の争奪戦、最終日には馬を追い立て素手で捕まえる野馬懸が行われる。これは、幕府統治後にあらゆる軍事訓練が取り締まられた中で、神事という名目で続けられた実践訓練だったという。幕府に対する、相馬氏の戦国大名としての意地と牽制だったのだろう。谷田部さんは語る。名のある旧家ではそれぞれ野

馬追用の馬を飼育していたが、震災後に手放した家も多い。祭りの復興のために関東から馬をレンタルしようと思っても、放射能で馬の血が汚れるからと、断られることもあったそうだ。ここには人だつて住んでいいるのよ、谷田部さんはそうこぼした。

阿武隈高地の峠付近、飯館村の中央部を通って行く。道の両脇にひろがる広大な平地には、草が生い茂り、風にたなびいていた。元々は水田だったそうだが、計画的避難区域に指定されて以降、飯館村は無人の村となり、農地は荒廃した。放置された水田を、セイタカ



草が生い茂り風にたなびく飯館村

アワダチソウという外来種が覆い尽くしている。セイタカアワダチソウは、アレロパシー効果といって他種の成長を抑制する物質を出す性質があり、周りの植物を駆逐しながら侵略的に繁殖する。横根がびっしりと張り巡らされた農地は、再び作付するために大変に苦勞するそうだ。それだけ畑や田んぼというのは、人とともに生きているのだと、その話を聞きながら思った。

飯館村の線量は高い。車に乗っていても、峠を登るにつれて線量計の示す数字は上がってくる。上がり続ける数字と、廃墟と化した民家だけが放射能の存在を語るが、窓の



重機で除染した土が、フレコンバッグに詰められて並ぶ

外は晴れ晴れとした農村だ。放射能は見えない。その意味を再確認する。

除染作業中の農地も数多く見かけた。除染作業は人員の確保が追いついておらず、順番待ちの状態だ。農地の除染は、まず表面の草を刈り取り、重機で表土を10cmほど剥ぎとつていく。その後の工程は2種類あつて、「天地返し」と「客土」と呼ばれる。天地返しは、表面の汚染土壌を、同一農地内の深部に埋める方法だ。一方、客土は名前の通り、汚染されていない土を外部から運び、削りとつた表面に敷く。飯館村では風評被害を懸念して全面的に客土を採用したそうだ。そのため、除染済みの農地には汚染土が詰められたフレコンバッグが並ぶ。1袋1トン、20個ずつの山があちこちに積まれている。増え続ける汚染土の行き場所は、本当に用意できるのだろうか。

本質的な復興を求めて

南相馬に到着し、私達は除染研究所を訪ねた。もともと原町中央産婦人科の看護師宿舍だった建物を事務所として利用している。迎えてくださった、研究会メンバーの箱崎亮三さんのお話は、除染の現状から未来の話まで幅広い。被災地の除染は着々と行われてはいるが、箱崎さんに言

わせれば問題は山積みだそう。汚染土の仮置き場の問題、予算の問題、広大な山間地、経済的な受注関係はゼネコン主導であり復興資金が現地へ降りてこない事など、お話し非常に具体的・現実的で、まさに現場の声だった。

箱崎さんらは、たった今問題に直面している、ここ南相馬に腰を据え、除染を科学的に見つめ続け、前向きに復興への道を探ってこられた。実際、土壌中セシウムの分子的な様子など、これまで未知だった除染に関する重要な研究成果も明らかにしてきた。

しかし研究を続けてこられたある日、「このまま除染が完了したとして、南相馬は以前の状態にもどるだけだ。問題は震災以前から存在していた」そう気がついたそう。実際、震災以前から、日本、特に地方では様々な問題が露呈し始めていた。少子高齢化、過疎化、自然環境の破壊、農業の衰退、エネルギーの外部依存、食料自給率の低下……。それが南相馬では震災によって、放射能汚染とともに加速度的に顕在化したのだという。

ただ闇雲に除染を押し進めていって、仮に放射能汚染の問題が収束したとして、そのあとに残るのは、休業により弱った農産業と、人口減少・高齢化で疲弊したコミュニティである。それでは、本来目指すべき市民の豊かさは取り戻せない。

箱崎さんらは、『本質的な復興とは何か?』を真剣に考え続けた末、人々の豊かさを復興するためには「あたらしい価値観・あたらしい生き方・あたらしい当たり前」を創造していかなければならないと結論づけた。「福島で起こっている問題は、いずれ日本、そして世界で起こる問題だ。ここ南相馬で本当の意味での復興を成功させれば、前例として人類の幸福に貢献できる」箱崎さんが口にする言葉はどれも壮大で、夢にあふれている。

除染だけの復興はありえないと悟った箱崎さんらは、「えこえね南相馬研究機構（以下えこえね研究機構）」を社団法人と



ソーラーパネルの設置工事

して立ち上げ、既に具体的な行動を通して、あたらしい価値観の輪郭を示そうとしている。それは、再生可能エネルギーと農業の融合だ。

現状、除染が成し遂げられたとして、依然残り続ける問題は、雑草が生い茂り荒廃した農地と、人と企業が流出し停滞する地域経済である。それを同時に解決する起爆剤として、彼らはソーラーシェアリングという農法を提案している。農地に架台を建て、棚の上にソーラーパネルを設置する。作物の日光不足が心配であるが、実は、作物には生育に十分な光量が存在し、必ずしも全ての日光を必要としないのだという。飽和光量以上のエネルギーは光合成量の増大に貢献せず、いわば無駄になっている。これを発電に利用する。

どうせ休耕中の農地なのだからメガソーラー（大規模太陽光発電所）として利用すればいいじゃないか、そのような安直な発想に、箱崎さんはこう答える。農地は作付をし続けなければ死ぬ。農地が農地でなくなれば、農業は永遠に再生しない。そうなれば地方のコミュニティが自給的に生活を営み続けることは不可能になるし、これまで農業が受け皿となってきた雇用は崩壊してしまう。設置された後のメガソーラーが、新たな雇用を生むだろうか。

ソーラーシェアリングの農地に作付する作物は、菜種を

考えているそうだ。現在、菜種油の自給率は0.04%。かつて、油は自分たちで絞るものであり、どの村にも搾油機があったという。アブラナはセシウムを吸収しやすいと言われる。吸収されたセシウムは菜種まで移行するものの、搾油した油にはほとんど抽出されないのだという。私はこの話を聞き、非常に興奮した。農地を殺したくない、その気持ちはとてもわかる。しかし、汚染された土壌では法的に作付ができない。ましてや消費者は、除染がある程度進んだとしても、そこで生産された作物に手を伸ばさづらい。これが、科学的にセシウム移行が極めて小さいとわかっているのなら、稀有な国産菜種油を求める人は多いだろう。放射能で汚染された点以外は、豊かで肥沃な土壌なのだ。この事実をつきとめたのもおそらく、真摯に測定を続けてきた人々の成果なのだろう。

菜種油などの農業収入に加え、ソーラーシェアリングを実施することで、売電収入が見込め、農家の経済的な自立とエネルギーの自給が実現できる。えこえん研究機構ではさらに、ツーリズム（観光業）を介した交流人口の増大や、農業6次化（ブランド化など農業経営の多角化）による地域特産品の開発が、地域全体の活力につながるだろうと期待している。

全てがうまくいくかどうかは分からない。農業と再生工

ネルギーだけで、地域全体の経済が活性化すると考えていない。箱崎さんたちは、経済の落ち込みを牽引されて沈んでいった市民の豊かさと活力が、あたらしい生き方・価値観を武器に飛躍的に向上することで、今度は経済を引き上げていく。これは人々に希望を与える起爆剤なんだ、そう語ってくれた。

えこえね研究機構のホームページを見ると、研究会としての3つの柱の中心に「暮らし」が据えられていて、「豊かな暮らしを考えること」を最初の取り組みに掲げている。地域全体が、前向きな復興活動を通して、依存しない生活とは、豊かな暮らしとは、それを考えていって欲しいのだろう。

箱崎さん達は、「再エネの里」と名付けたモデル地区の建造の真最中だ。9月1日には太陽パネルの設置工事を進めていたソーラーシェアリングが完成したばかり。再エネの里の構想はまだまだ盛り沢山だ。ハウスの屋根や農地法面へのパネル設置、コットンなども栽培予定、近くの山には桜を植林し花見の名所にするそうだ。計画はたくさんあるが、どれも実現可能性に気を使っているという。

箱崎さんの目は、常に前を向いている。ただ、描く未来は絵空事ではない。南相馬・子どもたち・世界の未来、それも現在から地続きの明るい未来を見つめている。除染研

究所を立ち上げた時の、院長の故高橋亨平先生の言葉はこう始まる。「南相馬市の復興計画の中で最も重要な課題は、未来であり夢である。それらは全て、子供たちにかかっている事は明らかである。」我々は高揚した気分のまま研究所を後にした。

原発まで7キロの地に立つ

その日の夕方、原町高校のPTA会長である石川俊さんに浪江町へ連れて行ってもらった。いまでも原発から半径10km以内は一般車が立ち入ることはできない。石川さ



浪江で、取り残されたままの漁船

んは建設業を営んでおり、許可車両を持つため検問を通過できる。浪江町は津波によって沿岸部に壊滅的な被害を受けた。難を逃れた内陸部も計画的避難区域に指定されたために、無人の街と化し、現在では朽ち果てた廃墟も多い。

初めて震災の爪痕を目の当たりにする私は、現地に入るまで、気負いのようなものがあつた。無意識ではあるが、現場に立てば、当然心動かされるはずだ、というプレッシャーだったのかも知れない。しかし、検問を抜け街へ入ると、焦りのようなものは消え、やけに冷静な自分がいた。津波によって一階部分だけ破壊されてしまった家もある。木造の建屋は潮風に侵食され崩れ落ちている。しかし、震災直後にテレビから流れる映像から感じた、グロテスクともいえる津波の凶暴さは感じられなかった。なぜだろうか。さらに進むと、全てが流されてしまった沿岸部に到着する。積み上げられた瓦礫、取り残されたままの漁船、横転した車、剥き出したコンクリートの基礎。不謹慎だとも思う。しかし私には、人工物が風化しきつた風景に違和感はなく、元々、そこにそうやってあつたもののようにさえ感じられた。人が住めないというのは、そういうことなのかもしれない。津波に飲まれてしまった町は、人の手を拒否し、すべてを自然に明け渡してしまった。人が撒いた放射能によって。

石川さんは沿岸部に暮らしていた方々の歴史を話してくれた。かつて、この一帯に住んでいたのは、天明の大飢饉をきっかけにした北陸移民の人々であった。北陸では、浄土真宗門の戒律により、間引き、つまり子殺しができなかったために、飢饉の際人口の多さに苦しんだ。そこで彼らは、当時開拓労働力を求めていた相馬中村藩へと新天地をもとめて移り住んだ。人民移動が固く禁じられていたなかでの長旅は、夜な夜な一カ月を要し、文字通り命がけだったそう。移民政策を行った藩主は、移り住んだ人々に開拓した沿岸部の土地を与えたが、地元民は彼らを差別した。

差別され労働力として苦渋を飲んできた人々の子孫が、時を越え津波の被害を受けた。これは相似形なのだと石川さんは語る。かつて、北関東と東北を隔てる関は、勿来の関と呼ばれた。「なこそ」とは「来るな」という意味。中央の人間がいくべきところではない。そんな差別意識が込められている。勿来の関を越えたらひとにあらず、とまで言われたそう。

中央に利用される地方民、相似形。この構図は時を越えてもかわらない。原発はいまだに地方にしか作られていない。やっかいごとはすべて押し付けられ、東京へ電力を送っていた原発のせいで、自分たちは生活を奪われた。このような歴史事実と、中央と地方という認識は、話を聞く

まで知る由もなかった。

原発から7kmにある請戸橋に立ち、あらためて被災者の無念を思った。この周辺では3月12日、瓦礫の下でまだ生きていた人々も多くいたそうだった。しかし原発事故により救急隊は立ち入ることができず、彼らは命を落とした。助かった人々も再びその町に帰る道は残されていない。悔しかっただろう。当事者でない私にも怒りが湧く。私は橋の袂で、静かに手を合わせ目をつむった。

顔を上げると真正面に、福島第一原発の排気筒が見える。浪江の町からでも鮮明に姿が見えることは珍しいと聞く。



福島第一原発まで7キロ、正面に原発建屋と排気筒が見える

白い建屋は2号機だろうか。全てはあそこから始まった。あそこでは何も終わっていない。収束には何年かかるかわからない。しかし同時に、福島の人々の新しい生活は始まっている。

故郷で生きると決めた人々は今後、永々と放射能と付き合っていく。私が今回出会った方々は、皆前向きだった。

南相馬でクリーニング店を経営する高橋美加子さんは、私にこんな話をしてくれた。「諦める」という言葉は「明らかにする」が本来の意味であり、仏教用語で「諦観」の「諦」は、真理をつまびらかにする事を意味する。物事の道理をわきまえ、願望の叶わない現実を納得して「諦める」仏教思想は、環境や他人のせいにして妥協的に「あきらめる」ことは全く違う姿勢だ。なぜ高橋さんが私にこの話をしてくれたのか、聞きそびれてしまった。2年半経った今だから思える『覚悟』を告白してくれたのかとも思う。除染研究所の箱崎さんも、東電や行政への苛立ちにはなく、人々の暮らしに向き合っていた。放射能と戦い続けてきた末の、『諦め』を感じた。

もう一度、原発の姿を眺める。これまでの2年半震災と共に生き、あらたな生き方を模索している福島の方々から学ぶことは多い。私は、消化しきれない思いを反芻しながら帰路についた。

震災から2年半、人々に蓄積する疲労

横内香苗（事務局）

たものの再び地元に戻り仮設住宅の避難者に寄り添っている。

毎週仮設住宅の集会所で、仮設住宅の住民を対象にお話の会を設けている。

「絆一座」と名づけ、栄養士さんによる美味しく簡単な料理の紹介、一日の塩分の目安などを紹介し、皆さんに上手にわかりやすく、栄養学・水分補給などを説明している。首にも巻けない、頭にも巻けない「負けないタオル」を使って体操も考えているそうだ。遠藤先生は「皆さんは世界で初めて震災と津波を一度に経験したのですよ」とおっしゃり、「一緒に乗り越えていきましよう」と被災者に寄り添い、ユーモアを交えながら励ましている。

診療所で出会った男性に「仮設住宅



仮設住宅の集会所で話をする遠藤医師

「もし第二の福島原発事故が起きたら迷わず支援に行くよ」

そう言ったのは福島市南相馬市内の仮設の絆診療所の遠藤医師。震災直後から残された市民を守り、一時は避難し

の住民の話を聞いてやってよ」と言われた。そこで診療所近くの仮設住宅の集会所におじやました。集会所では毎日お年寄りがお茶を飲みながらおしゃべりをして一時を過ごす。震災から2年半が過ぎようとしているが復興とは名ばかり。時間の経過とともに避難の事、仕事の事、家族の事など新たな問題も出て、人々は疲労が蓄積している。

少しでもリラククスして欲しいと思いい、学んでいる整体の手当をさせていた。だきながらお話を伺った。「震災前は農家で野菜を作ってたけど、ぜんぶ津波で持って行かれたよ」と「ここ（集会所）に来るとおしゃべりできるから気が紛れるんだ」。それでも集会所に出てくる人も限られている。作付け出来ない田んぼを目の前にしながら、3度目の稲刈りの時期を迎える。心の病いに苦しむ方も増えているという。行政は一刻も早く命に関わる問題対応をして欲しい。

現在JCFが提供するガラスバッジを装着している方は南相馬では10人。行政がガラスバッジ装着を始めた事、1年間装着し、自分の状況がわかってきた事、線量が震災当時より低くなってきた事、線量が震災当時より低くなってきた原因のようだ。南相馬市立病院でホールボディ検査を行った方にもバッジを装着していただいたが、やはり継続した装着には至らなかった。市立病院でバッジを装着した方は内部被曝検査で値の出た方を対象とした。しかし年配の方が主で3カ月に一度のホールボディの測定のために毎日バッジを装着することは困難だったようだ。また2つのデータを統合的に見る難しさがある。坪倉正治先生のブログにも掲載されているので参考にしてほしい。

<http://apital.asahi.com/article/fukushima/2013070100005.html>

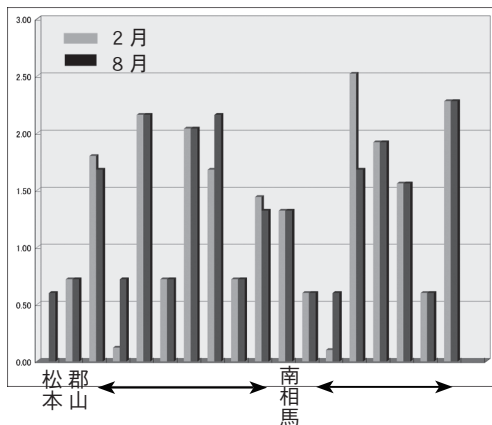
50個用意したガラスバッジは現在主

に郡山市や福島市で利用されている。2012年の5月まで利用されたガラスバッジの状況をグラフにまとめてみた。同じ地域でも個人によって数値に差があるので平均はあまり参考にならないが、空間線量の減少とともに当然外部被曝も昨年より減っている。しかしスポット的に高い値がある。月ごとに計測することで、もし値の変動があった場合は心当たりを探ったり、除染などを依頼し、高汚染地への侵入を避けていたいただきたい。昨年のように継続する人が少なかったため、50個のバッジは、利用者がいなくなった場合、別の地域で装着していただいた。よって装着した延べ人数は88名である。

ガラスバッジの交換に伺うことで、実際の現地の様子も細かく知ることができる。発達障害を持つ小中学生を放課後に預かっている『きつずサポートかのかのん』さんも毎月訪問させていたたく施設の一つ。一人一人の状況に合わ

せた療育も行っているので入所希望者が多いそうだ。ランドゼロでも何度か紹介してきたが、8月に『じゅにあサポートかのかのん』として第二の拠点をオープンさせた。南相馬の療育教育に

2013年ガラスバッジ線量比較 (mSv/年)



*グラフの線量は、装着者の月間線量を年間線量に換算した値です

熱心な地域ではあるが、またまた手が足りない。大学生らに実際の現場を見て学びに来て欲しいと話していた。

同じく南相馬で障害福祉サービスを行っている『ほっと悠』（理事長・村田純子さん）は小高区役所の中に『カフェいつぶくや』をオープンさせた。小高地区は津波被害が大きく、警戒区域にも指定された場所だ。4月以降は指定区域が解除されたため、家の掃除や草刈などに訪れる人も多くなった。カフェではお弁当やお茶を提供して喜ばれている。提供するコーヒーは震災前飯館村で営業していた亜久里コーヒー。震災後の片付けを手伝うボランティアの拠点が区役所前にあるので、手作り弁当は利用者に喜ばれている。他にもお弁当は図書館や雲雀ヶ丘病院内でも販売している。福祉の現場が区役所内にある場所は日本中探してもあまりないのではないかと思う。南相馬は再生に向けてあらゆる分野で市民の

力を結集している。外からの力はほんの微力に過ぎない。住民の底力は計り知れない。疲れが体や心に影響しないことを祈るばかりだ。

ほっと悠を応援する横山夫妻は津波で家を失った。今は借り上げ住宅で暮らしているお二人が、津波で被害のあった小高区の浦尻地区を案内してくださった。震災前は海岸沿いに家が建っていた。「家はここにあつたんだよ」と指差す先にはコンクリートの基礎だけが残っていた。津波で流されていく様を高台から見ているという。辛い思い出が蘇ってきたのだろう。横山夫妻が海を眺める時間はわずかだった。「実際現地に来てこの場に立って、感じて欲しい」とおっしゃっていた。見学者を案内するときは作業する人々に邪魔にならないように気を使っているということだ。横山夫妻は松本市内の高校生が南相馬を訪れた際も同じように案内してくださった。高校生の目

に被災地はどのように映ったのだろうか？

また、同じ南相馬で原発から20キロ圏内ギリギリでホテルを営む大留さんにも現地を案内していただいた。JCFをサポートしてくださるボランティアの谷田部さんも同行した。津波被害の地域は2年半経った今でも一部がれきや倒壊した家が残されている。大留さんは震災直後からホテルを支援物資の拠点として提供、今でも仮設住宅の住民のために力を注いで下さっている。

一度避難した住民のうち南相馬市内の小学生は震災前の57%が、中学生は67%が戻ってきたそうだ。原町高校では震災前240人だった1年生が現在は160人。クラスは2クラス減ったとの事。仮設住宅の充実、除染、そして何より原発事故が収束しない限り、街の再生には時間がかかりそうだ。

2012 年度ガラスバッジ装着者の積算線量
(自然放射線込み年換算の積算線量)

No.	年齢	性別	地域	年/ミリ シーベルト
1	60	女	伊達市	2.76
2	26	女	稲敷市	0.72
3	38	女	郡山市	1.44
4	6	女	郡山市	1.62
5	57	女	郡山市	1.78
6	32	女	郡山市	1.44
7	8	女	郡山市	2.90
8	12	女	郡山市	0.72
9	38	男	郡山市	0.79
10	47	女	郡山市	0.76
11	35	女	郡山市	1.10
12	39	女	郡山市	1.22
13	65	女	郡山市	0.96
14	40	男	郡山市	2.37
15		女	郡山市	1.62
16	45	女	郡山市	1.20
17	50	女	郡山市	1.72
18		女	郡山市	0.06
19	42	女	郡山市	1.20
20	39	女	郡山市	1.17
21	37	女	郡山市	1.29
22	33	女	南相馬市	3.09
23	34	女	南相馬市	2.40
24	19	女	南相馬市	2.45
25	24	女	南相馬市	1.32
26	54	女	南相馬市	0.82
27	52	女	南相馬市	0.96
28	27	女	南相馬市	0.61
29	72	女	南相馬市	2.52
30	32	男	南相馬市	1.16
31	73	男	南相馬市	2.32
32	24	男	南相馬市	2.38
33	69	女	南相馬市	2.72
34	52	女	南相馬市	1.80
35	33	女	南相馬市	1.84
36	12	女	南相馬市	1.86
37	11	男	南相馬市	1.98
38	9	女	南相馬市	1.80
39	8	男	南相馬市	1.92
40	63	男	南相馬市	1.80
41	66	男	南相馬市	3.16
42		女	南相馬市	1.74
43	64	女	南相馬市	1.68
44		女	南相馬市	1.74

45	70	男	南相馬市	2.44
46	71	男	南相馬市	0.84
47		男	南相馬市	2.26
48	38	男	南相馬市	1.79
49	70	男	南相馬市	2.69
50	67	女	南相馬市	2.58
51		女	南相馬市	0.60
52	30	女	南相馬市	4.76
53	76	女	南相馬市	2.21
54	72	男	南相馬市	1.53
55	53	女	南相馬市	1.65
56	55	女	南相馬市	1.86
57	22	女	南相馬市	0.84
58	81	男	南相馬市	1.02
59	55	男	南相馬市	2.46
60	73	男	南相馬市	2.11
61	75	女	南相馬市	1.68
62	71	女	南相馬市	1.32
63	23	男	南相馬市	2.16
64	70	男	南相馬市	1.83
65	59	女	南相馬市	2.47
66	69	男	南相馬市	1.14
67	69	女	南相馬市	1.44
68	73	女	南相馬市	2.16
69	55	女	南相馬市	0.72
70	25	女	南相馬市	2.19
71	40	女	南相馬市	1.91
72	25	女	南相馬市	2.11
73	78	女	南相馬市	1.36
74		女	須賀川市	0.79
75	31	男	相馬市	0.89
76	39	女	田村市	0.85
77	26	女	田村市	0.77
78	11	女	福島市	2.07
79	45	女	福島市	1.85
80	13	女	福島市	2.26
81	39	男	福島市	1.58
82	32	女	福島市	1.54
83	21	女	福島市	1.22
84	40	女	福島市	1.25
85	8	男	福島市	1.18
86	18	女	福島市	0.91
87	17	女	福島市	1.42
88		女	福島市	2.83

南相馬からの便り

子どもたちの明日、未来のために

一緒に行動しませんか！



高橋美加子さん(右)

台風一過、ここ南相馬は朝晩の涼しさが秋の到来を告げています。津波と放射能に翻弄された大地は雑草で覆われ、美しい緑の草原となつて広がっています。高く澄んだ空と吹き渡る風の中に立つと、あれほどの災害に遭遇しながらも一時も歩みをとめず再生を続けている地球の鼓動が、はつきりと伝わってきます。

自然は生きています。ふるさとの大地は生きています。

原発の相次ぐ爆発で命からがら逃げたあの日から2年半が過ぎ、私たちの暮らしは次のステージを見つけ出せずに

停滞ムードが漂い始めています。荒れたままの田畑、進まぬ除染、離れ離れになった家族、心が萎えて仕事に復帰できない人々、過酷な人手不足、身近な高齢者の方々の相次ぐ訃報、原発事故がもたらした負の現象は、数え上げたりきりがないほどです。それらすべてを内包し、時は移ろってゆきます。

そんな混沌の中でも、子どもたちは確実に成長しています。大人たちが悲嘆にくれている時、健気に励ましてくれたのは子どもたちでした。過酷な環境に閉じ込められた子どもたちは、それにもかかわらず、あふれるような笑顔を見せていました。

その姿に生きる気力を取り戻し、未来を創る気持ちを起こした大人たちがいました。南相馬では、子どもたちの未来のためという気持ちに突き動かされた人々のつながりが一つのエネルギーとなつて「みんな共和国」という夢の空間が生まれ、現実には、高見公園という何もなかった広場に、たった1年でアスレチックや冒険遊びができる遊具を備えた大人も子どもも自由に集えるみんなの広場が誕生したのです。「想いは実現する」ということは真実でした。

📌 ロセスは <http://www.hokuyosha.com/> 南相馬からの便り7・8参照

この活動は現在進行形でまだまだ続いています。志に賛



同する全国の
 方々の応援を
 いただき、今
 年は、高見公
 園に、小さな
 子どもが安心
 して水遊びが
 できる「じゃ
 ぶじゃぶ池」
 外でスクリーンで観劇をするほどの大反響を呼び、流した
 汗と涙を100倍も上回る大きな感動を生み出しました。
 来年早々には地元南相馬で上演しようと燃えています。
 このように、南相馬では内外の区別なく、地域に投げ込
 まれた「個人の想い」という小さな志が大きな波紋となっ
 て地元の人々を揺り動かし、ゆるやかな、でも、大きなう
 ねりを創りだしています。

ができ、地元にいる子どもたちばかりでなく、久々にふる
 さとに戻ってきた子どもたちと家族の交流の場ともなり、
 心のオアシスとしてたくさんの方々の笑顔と喜びを生み出しまし
 た。これは、保育園をやっている『メロス』さんの志から
 生まれたプロジェクトです。

また、みんな共和国のテーマソングをつくってくれたシ
 ンガーソングライターのナツポは南相馬&杉並トモダチプ
 ロジェクトを立ち上げ、両地区の子どもたちによるミュー
 ジカルを企画しました。「心と心の交流が一番!」というナツ
 ポの想いから生まれた「まんまる革命」と題したこのミュー
 ジカルは、半年にわたるレッスンで両地区の子どもだけで
 なく大人を巻き込んだ一大プロジェクトでしたが、9月
 15日に杉並の高円寺で上演され、入りきれない人たちが場

一方、この2年半の体験のなかで、とても気になること
 があります。それは大人の生き方の姿勢です。私たちは自
 分が暮らす日本という国を、他人事のように批判していま
 せんか? 「国が、東電が」と繰り返す大人たちの怒り
 や嘆きの言葉が、それを側で聞き続ける子どもの人生観に
 どんな影響を与えているか思い巡らせたことがあります
 か?

何気なく垂れ流す大人の愚痴が、子どもの心をスポイル
 しています。困り込まれた子どもたちが「死ね」とか「呪
 い」などという言葉を吐き出したという話を聞くと、子ど
 もたちの心に秘めた悲しみ、苦しみの大きさに胸がつぶれ
 る思いに駆られます。親の言葉を一番ストレートに信じる
 のは子どもです。親を苦しめる者は子どもにとっては憎む
 べき敵です。大人の無自覚な言動が、将来、自分の国に敵

意を持つ若者を作り出すことになるのではないかという危機感を募らせています。今の社会を作り出したのはわれわれ大人です。大人が悲観的にならず、希望を語るという姿勢を子どもに見せなかつたら、子どもは自分の国の未来にどんなイメージを持てるのでしょうか。

未来を創るのは大人の責任です。

未来というのは、遠い先のことではなく明日です。

一日一日のことです。

一日一日想いを持って暮らすことが未来をつくることになるのです。

それが、子どもたちの未来につながります。

原発事故に潰されず、それぞれの暮らしの場所で原発に左右されない新しい生き方を見つけたす行動を始めようではありませんか。未来を見据えて、まず一步、自分の足元から未来につながる行動を始めませんか。

25年前に、核の時代を生きる人間の心を予測して語ったジョアンナ・メーシーの「絶望こそが希望である」という言葉が甦っています。何事もない平穏な暮らしが続く中で「絶望」に取り憑かれた沢山の人がいる日本の社会。私

たちは原発事故という嵐に晒され人間の原点を体験しました。人が人でいられるのは、どんな過酷な状態になっても生き続けようとする、体の底から湧き上がって来るエネルギーを持つているからではないでしょうか。悲しみ、絶望、その底に見えてきた「一筋の光、それを言葉で表すとしたら、やはり「希望」です。

希望の象徴は子どもです。私たちは、絶望の中からも希望が生まれてくることを身を持って知りました。「もしかしたらこの地は核の時代を生き抜く希望を紡ぎだすという大きな使命を与えられたのかも知れない」と思うようになりました。絶望の底に希望が隠れていることを知った今は、恐れずに絶望に目を凝らし、真実をみようとする事ができるようになりました。南相馬ではそれを踏まえて新しいチャレンジをしようという志を持つ人たちが行動を始めています。

子どもたちの明日、

未来のために一緒に行動しませんか！

2013年9月20日

高橋 美加子

第 98 次訪問団&スタディツアー 心電計支援とセットアップ



左から河内さん、湯元さん、神谷事務局長、イリーナさん、管野さん、藤田さん、野口さん、小池さん、藤牧さん、樹神さん（現地合流メディカルエンジニア）

立場や経験の違いで同じ事柄でも受け取り方が違い、さまざまな表現がある。

私達が原発事故をめぐって語る時、自分の立ち位置を確認する時、自分とは違う声を受け止めたい。

『Hiroshima Nagasaki
and Fukushima』

小池 保寛（JCF理事）



ベトカ地区病院で心電計を前に緊張の面持ちの小池さん（右端）

『city of…Tokyo!』最近こんなに鳥肌がたつたことはないというくらい感動が押し寄せてきました。時刻は5時20分、中央高速道路甲府ICを車で通過したところでした。

56年ぶりに東京にオリンピックがやってきます。野球を愛している私としては、残りひと枠の競技には野球、ソフトボールの復活を祈るばかり。しばらくすると感動が落ち着きました。

冷静に考えると、東電の汚染水問題は終息どころか日々新しい事実がこれでもかとばかりにニュースで流れている現状で、本当に世界から人をお招きしても良いのだろうか、本当に東京で良かったのだろうか、オリンピックの予算があれば、原発処理に全力をもって充てるべきではないだろうかなど、感動とは相反する様々な感情が湧き出てきます。

2013年9月8日、私のスタディツアーは華やかなニュースの感動と、

納得できない複雑な感情が入り混じったまま始まりました。今回の最大のミッションはベトカ地区病院ナージャ院長からのリクエストである心電計の寄贈とセットアップでした。ペラルーシ共和国ゴメリ州ベトカ地区は27年前のチェルノブイリ原発事故被害の中でも最も汚染がひどかった地域です。市の汚染マップではベトカ地区を三等分したその真ん中が最も汚染がひどいことを示しています。真っ赤な色で分けられていることがその事実を伝えていきます。59の『埋葬』された村も多くはそこにあつたのでしょうか。

渡航3日目の9月10日、ベトカ地区病院を訪問します。

美しい花壇に囲まれたベトカ地区病院は、1日500人の外来患者を診察する中心的な基幹病院です。スーツケースで持ち込んだ心電計は、現在ベトカ地区病院で使用している心電計と

比べ、使用する記録紙は三分の一とコスト面にも優れ、患者IDを登録できるなど、益々管理向上に役立つ機種を選定しました。取扱い説明は無事終了し、英語版の取説も院内の先生方が対応して下さるなど、スタッフのスキルの高さに感銘を受けました。

任務は終了したと安堵したいところですが、この日の朝の出来事が無ければ大恥をかいたところだったのです。

実はメデイカルエンジニアにとって大事な工具を日本に忘れていたので、そのことに気づいたのは成田空港の発券カウンターで、時すでに遅しかったです。悪いことは続き、ベトカ地区病院訪問前に始業前点検をしようと宿泊先のホテルで心電計を開封したところ、工具が必要なのに気づいてしまったのです。こんな間の抜けたことは初めてでしたが、いやな汗が出るばかりです。ホテルのフロントに借りれば良いとおっしゃる方もいますが、何回もこの国に訪

問して分かるんです、頼めば水道管工事に使うような大きなペンチみたいな工具が出てくることを……。

途方もない脱力感であきらめながら朝食会場に行き食事をしました。ふと、視線を上げるとスタディツアー参加者以外にあきらかに日本人とわかる団体がいるんです。10回はゴメリに来ていますが初めて見ました、日本人の団体客。迷わず声を掛けます、小さなドライバーを持っていないかと。すると団体のツアーガイド役のフォトデザイナーの方が快く対応してくれたんです。万能ナイフを持っていたんです。お話を聞くと福島県のキノコ生産者の組合の方々だったのです。この国にキノコ生産者が来る意味は早々に判断できます。なにかのきっかけを求めて、完全復興のために多くの日本人がいつも戦っているのです。その方の好意のおかげで、ベトカ地区病院へのミッションが完結できたのです。

その日の夜、ホテルの敷地内にあるオープンカフェでビールを飲んでいました。近くには小さなプレハブ小屋の射的場があります。面白半分近寄ると、若い射的場の責任者が日本人である私たちを確認すると近づき、拙い英語でこう語り始めました。

『俺はチエルノブイリから近いところで育ったんだ。でも、いまでもこんなに元気でいる』

『俺のじいちゃんが言っていた。日本には3回悲しいことがあった』

『Hiroshima Nagasaki and Fukushima』

32歳の彼が事故に遭遇したのはきつと5歳か6歳のときでしょう。チエルノブイリからこんなにも近いことを、スマートフォンで説明してくれます。昼間はエンジニアの仕事をしている彼は、日本とベラルーシが同じ環境下で戦っていると、励まし勇気付けようと一生懸命に語ってくれま

した。

世界の中の『Hiroshima

Nagasaki and Fukushima』が、悲し

い現実の日本に対して共通された認識であることを痛いほど感じます。ただ福島原発に関しては、対策次第で悲しい現実から希望ある未来に繋げられる可能性があるし、帰還を目指して戦っている人がいる限り日本人一人一人が寄り添っていかなくてはなりません。

ベラルーシ共和国では国主導で土地利用を最適化するソフトプログラムを開発運営しています。汚染された地域や土地利用を管理し、農作物の汚染濃度を予測し汚染されていない作物を得るために必要な時間を割り出すという、話だけ聞いていれば夢のようなプログラムです。無責任に良いとは軽々しく語れませんが、国主導で積極的にそこで作付をしていく姿勢を示し、尚且つ健康管理、保養に十分予算付けす

ることを日本も見習うべきでしょう。

9月13日に帰国した時はオリンピック開催を素直に喜び、7年後に向けて原発問題を風化させない活動を小さくても良いから続けようという、すつきりした感情に覆われていました。

最後に、今回スタディツアーで出会った飲み友達？ いや、同志の皆様と、だらしのないエンジニアに万能ナイフを快く貸してくれた福島県の温かい紳士達に敬意を込めて御礼を申し上げます。ありがとうございました。

心電計セットアップ

藤牧久芳（メディカルエンジニア）

今回メディカルエンジニアチームの一員として医療機器セットアップとレクチャーを目的に参加しました。



心電計のレクチャーをする藤牧さん（中央）

支援機器の設置先はベトカ地区スリヤピッチャピッチ病院の外來棟と入院棟で、支援医療機器としてハンディー心電計とポータブル心電計の2機種4台と消耗品であるポータブル心電計の記録紙でした。ハンディー心電計は本体質量約130gの手のひらサイズで、単4形アルカリ乾電池2本を電源としており、左胸部に本体を直

接当てることにより心電図波形が画面で確認でき、またSDカードにメモリーされる携帯型のコンパクトタイプの機種です。ポータブル心電計はA4サイズで重量2kgのコンパクト（交流電源）を使用するタイプですが、バッテリー内臓の為、コンセント無しでも検査が可能で、キャリングケースに入れて持ち運びができます。心電図12誘導が3枚の記録紙に自動でプリントアウトされる高機能の機種で、病院での設置の他、それ以外の健康診断などにも携行できる為、幅広く使用が可能なタイプの機種です。

我々の病院到着を心待ちにされていたナー ज्या院長先生の歓迎を受け、機器のセットアップ後、担当の医師とナーに操作方法のレクチャーを行いました。新品の機器を目の前に病院スタッフは非常に嬉しそうで、興奮して聞いて下さいました。100Vの日

本仕様の為、220V用の変圧器をコンセントに接続し、心電計本体と接続します。電極を両手両足に4個、胸に6個付けスタートスイッチONにより3枚の記録紙に波形が印刷され、自動で止まります。現地で使用されている心電計を見せてもらいましたが記録紙が3倍の長さであり、データの保存がしにくく、ランニングコストが高価との事でした。それでこの機器は非常に素晴らしいと絶賛して下さいました。

一連のレクチャーでしつかり理解されましたが、パソコン用CDにPDFファイルで用意して行った英語版の取り扱い説明書を画面で開きながら説明すると益々安心された様でした。この2機種の用途については、ハンディー心電計は村の保健師が健康診断などでスクリーニング用として使用し、またポータブルタイプは病院での診断用の様でした。病院には1台の心電計しか

無い様でしたのでこれらの設置により、より多くの心疾患の患者さんが早期にリストアップされ、外来受診にて正確な診断を受け、的確な治療を効率よく受けることができるようになるものと確信し、この地に必要であり、非常に有効な医療機器の設置ができたことを大変嬉しく思いました。

最後に、今回の渡航ではベトカ地区病院以外にも幾つかの施設を訪問させて頂きましたが、皆さん福島原発事故を心から痛み、心配して下さい、自分達にできることは無いのか、あれば何でも協力したいとおっしゃって下さり、顔の見える支援活動を基本としてきたJCF、そして日本とベラルーシの温かい交友関係の深さに感動致しました。そして今回の渡航を含め、支えて下さっている皆様に心より感謝とお礼を申し上げます。本当にありがとうございます。

第98次訪問団&

スタディツアー

神谷さだ子（事務局長）

9月8日から13日の日程で、JCF第98次医療訪問団と福島の方、福島につながるメンバーが集ったスタディツアーが、ベラルーシを訪問した。メディカル・エンジニアチームはベトカ地区病院からリクエストのあった心電計を設置し、使い方を伝えてきた。

スタディツアーチームは、郡山市の「安全・安心・アクシオンin郡山」の代表野口時子さんからつながった方達で、見方がそれぞれ違うので、同行した私にはとても興味深かった。次号で皆さんから詳しく報告していた、たくさんにする。

原発事故から27年、歳月の経過と共に

に語る言葉がこれほどにも変わってしま

まうのか、中央政府の統制がこの様に敷衍していくのか、と愕然としたのが、ゴメリ保健局の副局長の言葉だった。

「ベラルーシでは、事故直後ヨウ素剤を飲み、甲状腺がんは増えませんでした」。開いた口がふさがらなかつた。1986年の事故後、10年間で504人の小児甲状腺がんが発症し、

他の甲状腺疾患も増えた。大人の甲状腺がんは今も右肩上がりに増え続けている、という事実を彼が知らないはず

が無い。1992年にイギリスの科学誌ネイチャーに、ベラルーシの小児甲状腺がんについてのジェミチック教授の論文が載り、IAEAやWHOでさえも認めたではないか。憤りを通り越して、議論する気にもなれなかつた。チェルノブイリ事故から27年、そして福島

第一原発事故から2年半経って、日本からの訪問団も多い。彼の中では、行政の姿勢として、新しい物語が作られ

ているようだ。

放射線学研究所での調査研究の視点は、福島でも大いに参考になる。それぞれの参加者の立場から、これからの暮らし方を考え、伝えていっていただけると思う。27年経た今でも、キノコからは高い濃度のセシウムが検出され、ホールボディカウンティングでも要注意の人がいる。森にはまだ半減期の長い放射性物質が残っている。

ベラルーシでは食品の検査・健康診断・子ども達の保養は日常的に継続されている。チェルノブイリから福島という時代に生きている私達は、防護対策と共に生き方についても、さまざまな立場の方々の声を受けとめ、歩んでいきたいと思う。

事故から27年のベラルーシ訪問

藤田 健 (常総生活協同組合)

*藤田さんが帰国後の報告会で使用した資料から抜粋させて頂きました。

☆スタデイツアーの日程

9月8日12時 成田発。

17時10分モスクワ着 (時差5時間)

9月9日10時30分 ベラルーシ着

ゴメリ州ゴメリ市 放射線学研究

所・ゴメリ州保健局・衛生局

9月10日 ゴメリ州 ベトカ地区

ベトカ地区病院・地区執行委員会・

保健局・埋葬の村

9月11日 ゴメリ州

自由食品市場

16時モスクワ移動

9月12日20時40分 モスクワ発

9月13日10時40分 成田着

☆参加メンバー

・野口時子

安全・安心・アクションin郡山(3a)

代表。福島第一原発事故後、放射能の不安から「子どもを守りたい」という思いから「安全・安心を求めて行動する会」を郡山市に住む主婦達

と結成。野口さん自身は2児の母。

・河内邦夫

室蘭工業大学 助教

専門は地質・資源探査等。福島第一

原発事故後の福島県の汚染状況を調

査。3月には3aの野口さんらと一緒に郡山市内1200kmの空間線量を自転車で測定。

・湯本雅典

フリー映像作家

東京出身の元教員。現在は学校での勉強に悩み苦しんでいる子どもたち

を受け入れる私塾を開設。それと同時に福島第一原発事故後の福島県の現状を取材、映像化する活動を行っている。

・菅野クニ

保健師

福島県飯館村出身。2012年4月

に夫と農園を開設する予定が、原発事故により中断。現在は福島市松川

町に避難中。将来の帰村に向けて、

飯館村の特産品「ナツハゼ」の原料確保やジャガイモの品種改良等に取り組んでいる。

☆訪問記

◎ベラルーシ共和国ゴメリ州ゴメリ市

はベラルーシ南東部に位置するベラ

ルーシ第2の都市。チエルノブイリ原

発より約150km。

ゴメリホテル周辺

ホテル前の空間線量0・005マイクロシーベルト/時。気温は朝晩は肌

寒く、息が白くなるが日中は20度前後。

ホテルの周りは緑も多く、とても住みやすそうな雰囲気を感じられた。

◎国立放射線学研究所

1986年6月に完成。ソ連時代に支部としてベラルーシとウクライナに2カ所作られた。

現在は87名の職員が働いている。現在もベラルーシ共和国・国立施設として国が運営しているがソ連時代の方が手厚い支援で今では維持するのが大変だという。

3・11後、日本からも多くの関係者が訪問し、ベラルーシの汚染状況や対策方法などを学んでいる。

27年経った今もなお、食品の放射性濃度だけでなく、土壌検査、熱反応、化学反応、サンプル開発などさまざまな研究がされていた。

ヴィクター・アヴェロン所長は次のように語った。

「東京と福島は離れてはいるが、オリンピックを開催して大丈夫なのか？27年経ったベラルーシの産物は今も汚染されている。福島にも時間が必要。

チエルノブイリに比べ、今の福島はそこまで悪くはないが、他の人は同じだと思っている。そんな場所でオリンピックなんてとんでもない。ベラルーシは比較的広いので移住できるが、日本はそれができないのが問題（私有地や生活習慣、文化の面からも難しい）。本来なら地域住民丸ごと避難するのがベストである。

私も日本（福島）に何度も足を運び、現状を見た。たくさんの家や人が津波に流され、多くの人々の命が失われた。本当に悲しい事だ。でも皆さんにこれだけは伝えておきたい。『放射能から生き残ることはできます。大丈夫です』日本の専門家はしっかりしているが問題は政治家だ。政治家に話が通らない。理解されないと動かないからとても難しい。ベラルーシでは、研究所―国―市民が繋がっている。政府（大統領）が研究所の報告書を聞いて、何を行うか決める。

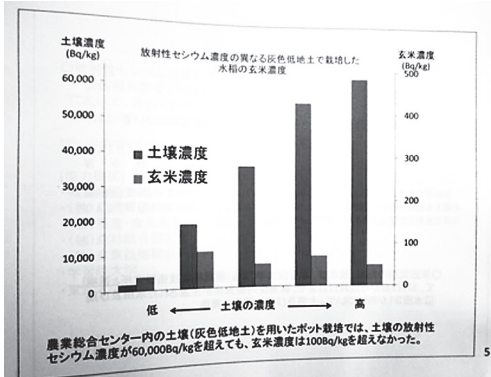
日本の政治家はベラルーシのデータを使わずイチからやろうとしている。学校での子ども達に向けた正しい教育も重要です。先生が簡単な言葉で子どもに伝えることで、子どもから大人に伝わる。子どもから教育していくことが大切なのです」

・レインボーステム

ベラルーシの放射線学研究所では、農地の除染には否定的で、チエルノブイリ事故後の経験と研究結果を基に、汚染分布マップ・移行係数データを投入したソフトを作り上げ、その土地ごとで栽培に適した農作物を選定し管理・利用する政策を行っている。このレインボーステム（放射能汚染予想プログラム）は汚染された土地に住み、農業を続けていこうとしている農家の方々を精神面においてもバックアップするものと自負している。

・日本の土壤は黒墨土こくぼくど

福島農業総合センターは、お米の田んぼにおいて土壤中の交換性カリに注目し、セシウムと拮抗するカリウムを田んぼに施肥することをすすめている。だが左のグラフのように、単にカリウムだけでなく、土壤自身がセシウム移行を抑制していると考えられる。



上のグラフでは土壤のセシウム濃度と玄米のセシウム濃度とは相対関係が無いことを表している(福島農業総合センター資料より)

日本の火山灰土を基礎にした「粘土—腐植—微生物」という土壤の総合力がセシウムを吸着・固定し、作物に移行されにくい状態を作っている。日本の作物はセシウム移行が少なく、豊かな母なる大地に守られる結果となった。

アヴィロン所長はチエルノブイリと日本(福島)は気候風土や土壤質が違うことについてはあまり考えていないように感じられた。全く同じではないので、それぞれに合った対策が必要と考える。ただベラルーシの研究結果は充分参考にしてよいものであったと思う。

◎ゴメリ保健局

保健局では、副局長からベラルーシで特に汚染被害の状況が大きかったといわれるゴメリ州の20の地区の当時の様子や今の体制について改めて説明していた。

ベラルーシ全体では甲状腺ガンの他に、がん(肺、乳、胃)、血液の病気に



ベトカ保健局で熱心にメモを取る藤田さん

ついて事故の影響であったと考えている(心臓疾患等の影響は否定)。ベラルーシでは当時は依然としてヨード不足だった。そのため多くの人が甲状腺がんになった。しかし、ゴメリ州では事故後すぐにヨードを飲んだので被害は少なく済んだ(事故後1週間後)。政府レベルで事故があったときのマニュアルが存在し、病院や女性はヨードを

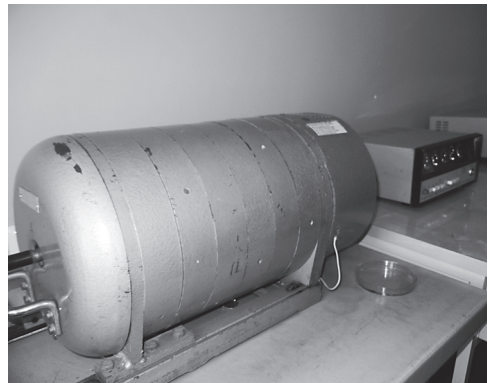
どのように飲むか知っていた。今では幼稚園や学校には看護師が常勤して子ども達の健康チェックを行っている。

★あくまで私の個人的な意見だが、かなり言葉を選び、慎重な発言（真実を隠している）に徹しているように感じられた。

ベラルーシでも甲状腺ガンの症状の発生が見つかったのは事故から3年後でそれから10年ピークが続いた。日本で同じことが起こるかは正直分からな
い。年齢や環境によっても違う。そのためにはスクリーニングを含めた定期健診が重要である。

◎ゴメリ州衛生局

下の写真はストロンチウムを検出する機材。見た目からもかなり古い型に見える。ベラルーシの中でも放射能汚染のひどいといわれるゴメリ州。その中でもベトカ地区が一番の高汚染地



ゴメリ衛生局のストロンチウム測定器

ある。「農地の半分は使えなくなり、住民の半分は移住しました」とアンドレ地区長。

◎ベトカ地区保健局

ベトカ地区では、食品検査において品目毎の基準が細かく定められていてその品目数は200品目以上であった。食文化によって摂取する食材は大きく違うはずであることから、日本

も細かく設定するべきである。

食品と水を中心に検査。地区の住民が自らの畑で収穫したものも検査を促し、現在で1日20件前後の持ち込みがある。セシウムが検出された食品は地区の住民全体に広報し、注意喚起しているという。ここ2年間は検出はない（注意が必要なものは森のもの：きのこ、野生動物）。ストロンチウムの検査はゴメリ州の保健局に出している。

◎ベトカ地区病院 外来病棟

外来専用の病棟で1日の外来人数は500人。外来病棟には外科、内科、小児科だけでなく、耳鼻科、歯科など数多くの専門科がある。またベトカ地区には外来病院の他に、入院専門病棟、リハビリ専門病棟、乳児専門病棟などが別々のところにある。

◎ホールボディーカウンター

私もホールボディーカウンターを使っ

て内部被曝測定をした。結果は0.006 mSv。一緒に測定した郡山市の野口さんも0.005 mSvと問題ない数値だった。

ベトカ力では住民は年1回の検査が義務づけられていて、今年は今のところ5千人が検査を受けて4名から高い数値が検出された。男女共に2人ずつで、年齢は39才、58才、59才、38才。原因として食べ物からの内部被曝が考えられ、森で採れたきのこなどを普通に食べていることが多い。

高い数値を検出された住民は病院の監視化に置かれ、入院しての再検査が義務づけられる。だいたい半年間、きのこなどの摂取を控えれば正常な数値に戻るそうだ。

・徹底したデータベース管理

現在、17400人+20000人(移住から戻ってきた人)を管理化している。データベース上では全ペラルーシの

データに入れるようになってきている。これにより各地区との比較もできるようになり、とても参考になっている。「低線量地域ならば、移住よりも安全な食料や水を確保した方が良い」とナージャベトカ力地区病院院長。

・0〜18歳の子どもは保養に行く体制が完備

ベトカ力地区の健康な子どもたちは1年のうち3週間は必ず保養に行くことになっている。費用はすべて国が負担。2005年までは年2回実施されていた。同じ地区の子ども達ではなく、症状の近い子どもたち同士振り分けて行くシステムになっている。

・充実した医療体制

日本からの支援もあり、ベトカ力地区外来病棟には32名の医師の他、多くの医療機器が揃っている。医療機器だけでなく、心療ケアも充実している。

小児病棟の室内の壁面は子どもが喜ぶように全面イラストが描かれている。

◎居住禁止地区

・エレナさん(78才)ベトカ力地区の居住禁止地域のひとつバルトロメフカ村に住み続ける。



ベトカ力地区病院小児病棟



エレナさんの台所左下に食材のきのこが見える

ご主人は亡くなつており、築60年の家に今は数匹の犬と猫と一緒に暮らしている（国はある意味黙認状態）。

この地区は1989年に庭、屋根、アスファルト等を除染したとのことだが、現在の空間線量は庭で1.2マイクロシーベルト/時、室内で0.9マイクロシーベルト/時

台所には近くで採れたりんごやキノ

コがたくさんあった。エレナさん自身も汚染されているのは分かっているがら食べているようだった。

◎ベトカ地区

・地域のお母さんと会う

ナージャさん（41才）

2人の息子さん（21才と5才）のお母さん。14才の時にチェルノブイリ事故が発生し、その後3年間は別の地域に移住していた。戻ってきて19才で地元の人と結婚。家族共々、健康診断を受けているが特に問題は出ていない。家庭菜園をしてそこで出来た野菜も食べている。親戚では10年前におじさんが甲状腺ガンで亡くなつたくらい。

アラヤさん（37才）

結婚して2人の子どもがいる。夫は地元の人。10才の時にチェルノブイリ事故が発生したが移住もせず、ずっと

この地に住んでいるが、健康被害はない。特に放射能汚染の教育を受けずに過ごしてきた。

2人に事故当時のことを聞いてみたところ、みんなパニックになっていたのは覚えていたが詳しくは覚えていない……とのこと。

・教会を再興

ベトカ地区のはずれにあるジェレズニキという村は事故直後は15〜40キュリー（1キュリー：3700ベクレル）の汚染地域で移住を余儀なくされたが数年前に戻ってくることで、イコ村のシンボルである教会を建て、イコンを飾ることができた。

現在26人の住民がこの地区に住んでいる。この教会からすぐ先は居住禁止区域になる。教会前のアスファルトで0.1マイクロシーベルト/時。脇の草むらで0.3マイクロシーベルト/時。

・ 地区病院に心電計を贈与。

ベラルーシでは心筋梗塞を含めた心臓疾患での死亡者の割合が多いことから医療関係者からの心電計の要望が多かったようだ。

その日の夕食は、病院のみなさんが私たちのために朝からテーブルいっぱい料理を作ってもてなしてくれた。

・ 埋葬の村記念碑

ゴメリ州はベラルーシの中でも特に汚染度が高く、1990年代に移住政策がとられ、地図から姿を消したいわゆる「埋葬の村」が存在する。祈念碑には地図から消された59の村の名前が記されている。

◎ゴメリ自由市場

旧室内体育館のような施設の跡地に出来たような巨大な市場。売っているものは食料品から雑貨まで300近くの店が軒を連ねていた



埋葬の村記念碑

☆感想

・ 思ったより居住区の汚染状況はひどくないと思った。反面、未だに居住禁止区域があるという事実や原発事故により埋葬された村が存在していることは忘れてはならない。

・ 今でも放射能物質を含んだ食品があることも事実で、27年経っても全く終

わっていないということ。

・ ベラルーシは国の管理のもと、子ども達が守られている（事故後、毎年の健康検査や保養の体制）。それに比べて日本の国策はかなり遅れていると痛感。

・ ゴメリ州の市場などを見ても住民が食べ物に不安を持っている様子はない。これは自治体（国）を含め、学校や市場などでも比較的簡単に検査が受けられることで住民に汚染食品に対するの安心感があるのかもしれない。しかし汚染されているのではと分かっているキノコを食する人がいるのも事実。

・ まずは食べ物による内部被曝をケアしていくことが大切で、ゴメリ州でも事故後3〜10年の間の甲状腺ガンの発生率が上がったということからも今後日本の子どもの健康調査に力を入れていくべきだと感じた。



ドイツ・マインツの脱原発便り



毎年秋に実施されるマインツ国際文化祭に今年も参加。日本食や習字、おりがみなど、大好評でした。国際文化祭の舞台では、盆踊り「炭坑節」を披露。数カ月前から練習を重ね、日本人だけでなく、ドイツ人やスペイン人、フランス人の仲間と一緒に舞台上がりました。

近江
まどか（マインツ友の会）

我が家の電気は100%自然エネルギー、

放射性廃棄物もゼロ

我が家で使用している電気は、100%自然エネルギーです。購入先は、シエーナウ電力会社。同社の電力のエネルギーミックスは原子力、石油、石炭に頼らず100%自然エネルギーで構成されており、放射性廃棄物の排出量はゼロ（2011年時点のドイツ平均は、キロワット時0・0005gの排出量）です。

市民がつくった脱原発電力会社

南ドイツ・黒い森の中に位置する人口2千人強の小さな村「シエーナウ」に拠点を構えるこの電力会社は、脱原発運動から生まれました。

昨年、日本でもこの電力会社の成り立ちや取り組みが紹介された映画や本が公開・出版されましたので、ご存知の方はいらっしゃるでしょう。

1986年のチェルノブイリ原子力事故後に、エコロジ的なエネルギー供給の実現を望む市民たちが集まり、市民投票や大手電力会社との交渉など長きに渡る活動を経て会社設立。1997年に電力供給を開始しました。

私たちが、「シエーナウ電力会社」を選んだ理由は、化石燃料や原子力に頼らない電気を利用でき、放射性廃棄物を出さないだけでなく、電気の調達先も、原子力発電施設を所有していない中小規模の発電事業者や市民共同体や自治体の設備など、電力生産をより市民の近いところで実現する「エネルギーシフト」へのこだわりが挙げられます。

また、以前、契約していた別の電力会社からの乗り換えも全て代行してくれ、

私たちの負担がほぼなしで、自然エネルギー電力を購入できるのも魅力でした。

さらに、自然エネルギー電力選択の背景には、従来の電気と料金に差がないことも挙げられます。シエーナウ電力会社の電気料金は、1キロワット時26・75セント（1ユーロ130円換算で34・75円）。これに毎月6・90



ドイツ近郊のオープンハイム小学校において日本の小学生について授業。日本の小学生の学校生活について説明するだけでなく、日本の文字の書き方やラジオ体操と一緒に練習しました。

ユーロ（同897円）の基本料金が掛かります。一方で、ドイツエネルギー・水経済連盟の発表によると、ドイツの2012年の電気料金の平均は25・74セント（同33・46円。年間電力需要3500kW/hで計算）。自然エネルギー電力は、一般の電気と比較すると若干高めではあるものの、極端ではなく、一般的に十分に受け入れることができる範囲の料金となっています。

目指すは2022年に予定されている

原子力撤退の前倒し

ドイツでは、電力市場の完全自由化が導入されており、一般の家庭でも、電力会社を自由に選ぶことができるため、私たちのように、自然エネルギーで暮らす家庭は珍しくありません。

2011年12月にエネルギーエージェンシーが実施した世論調査では、19%の回答者が自然エネルギー電力を既に購入しており、さらに22%の回答者が今後、自然エネルギーに乗り換えることを計画しているという結果が出ました。

ドイツでは、2022年に全ての原子力発電施設が運転を終了します。このまま、自然エネルギー電力の利用者が増加し続けると、原子力撤退まで、あと10年も待つ必要がなくなるかもしれません。



小さな一人

宮尾 彰

この夏は、「生命をつなぐ性」としての女性による仕事に辛うじて救われました。

考えてみるに、これは、大変象徴的な意味を持つ出来事ではないでしょうか。

「絶滅危惧種第一号は人間ではないか」

深い苦しみを経、今なお生命のたゆたう水俣の汀から、福島第一原発事故を見つめた石牟礼道子の言葉です。

私がこの原稿を書いているのは二〇一三年九月八日夜、未明に安倍晋三内閣総理大臣が地球の裏側で、

The situation is under control.

との歴史的妄言を吐いてから、まだ二十四時間を経ない、私を言い知れぬ眩惑に陥れた一日の終りのことです。

ひと月ほど前のこと、私は或る福祉施設の職員研修会に講師として招かれました。

会場に向かう車中、飯田市のシンガーソングライター・タテタカコの歌を聴いている内、それを引用したくなり、急ぎよ担当職員に依頼して、二曲を会場で流しました。

彼女がコンサートで歌うのを直に聴き、CDにサインをもらったのは、もう十年近く前のことになりました。

女流シンガーの多くにある男女の情愛というテーマから明確な距離を保ちつつ、性別を超えた人間信頼への希求を臆せずストレートに表現するアーティストです。

彼女の透명한歌声は、常日頃、法に触れて行き場を無くした障害者にかかわる職員達の琴線に触れ、困難な現実と向き合う勇気をあたえました。

『この人は、今どんな歌を歌っているのだろうか？』

思い立って調べた末に、一枚のCDと出会いました。

ジャケット表紙には、油絵を描くためのキャンバスを地に明朝体の黒字で一篇の詩が掲げられています。

「ふるさと」

彼女が、事故後故郷富岡町を逃れ、いわき市の仮設住宅に避難していた佐藤紫華子さんの詩に曲を付けたのです。

研ぎ澄まされたピアノ・ソロが、限り無く呻きに近い詩の言葉に寄り添い、一つの流れと成り、やがて「ふるさと」という一語の連呼へと昇華してゆきます。

わけでも、「心の底の／涙の湖に ある」とのフレーズに寄せた彼女の理解と共感の深さには息を呑みました。

続く作者自身による自作詩の朗読には、八十五歳の今も日本舞踊の名取として現役で活躍する彼女の姿が凜としたゆるぎない声の形と成って刻まれています。

即興によるピアノ伴奏は、あたかも舞を支える謡の如く、語り部の深く遠い息に乗り移っています。

タテと在仏の映画監督・江口方康との出会い。佐藤女史と制作者平山勉との長年に亘る親交。いわき市で活動中のバンドと双葉郡から避難中の女子高校生デュオの参画。この一枚の内に、親密な交歓と共振が充ちています。

八月末、都内で開かれた集会で出会った、福島県在住の精神保健福祉士の語りを忘れることができません。

彼女は、今この国で「ふくしまの」という日本語が喚起するイメージに、鋭く警告を発しました。

「岩手の」「宮城の」「茨城の」と並ぶようでありながら決して並ぶことのない、この言葉の内容についてです。

かつてショア（ナチスによるユダヤ人大虐殺）がそうであったように、或る一つの言説が誤った権威を帯びた時、夥しい数の人間の顔と名前が黙殺されるのです。

私たちは、いつまで大きな幻想にしがみつこうともがき続けるのでしょうか。小さな一人を置き去りにして。

あの日以来、この世界を動かす原理は、最早誰の眼にも明らかに転回しつつあるというのに。

※佐藤紫華子『原発難民の詩』（朝日新聞出版社）
『ふるさと』（発売先…ノーマディックレコード）



母から伝わる食卓

栗の渋皮煮、作る手間も楽しんで

秋になると母がよく作ってくれた、栗の渋皮煮の作り方をご紹介します。
ひと手間かける工程も楽しみつつ、みなさまも秋の味覚をお楽しみ下さい。

<材料>

栗 1kg・砂糖 700g・重曹（重曹の量は1回につき米粒5粒程度の分量。栗が大きいときは重曹の量を倍量にしてください）・水

<作り方>

1. 栗に熱湯を注ぎ、冷めるまで置いておく（皮がやわらかくなり剥きやすくなる）。
2. 1の栗の渋皮を破らないように鬼皮を剥き、水にさらす。
3. 鍋に2の栗と、栗がたっぷりつかる程度の水を入れる。重曹を加えて強火にかけ、煮立ったら極弱火にし20分間煮る。
4. 栗をザルにあけ、鍋を洗い栗を戻し入れ、洗い流すように流水を注ぐ。水がきれいになるまで繰り返す。
5. 3～4を合わせて3回繰り返す。この作業をしっかり行うことで、できあがった渋皮煮にえぐみが残らず美味しく仕上がる。栗が大きいときは渋みが残ることがあるので様子を見て回数を増やす。
6. 栗を水にさらしたままで栗の表面を指で軽くこすり、渋皮の筋を取り除く。硬い筋は渋皮を破らないように爪楊枝で取る。
7. 鍋に水2リットルと砂糖700gを入れて強火にかけ、煮立ったら一旦火を消し、栗をそっと入れる。
8. 沸騰の泡が出るか出ないかくらいのトロ火で1時間程度煮込み、蓋をして一晩置く。
9. 一晩置いたら栗を取り出す。栗は乾燥しないようにラップをしておく。
10. 鍋に残ったシロップを3分の2量まで煮詰めてから漉す。
11. 漉したシロップに栗を戻し入れてトロ火にかけ、栗に熱を通し、熱いうちに煮沸消毒したビンに詰める。（冷たいビンに熱い栗を入れると割れることがあるので注意！）

*長期保存の場合は瓶や蓋の消毒を完全にしてから栗を詰め、煮沸してから密封する。



モスクワ祭り



秋は昔から、収穫と相まってお祭りの季節です。昔ロシアでは、収穫祭は1年の内でも大切なお祭りの1つとして、もともと農家の人々により、広範囲の村々で行なわれていました。しかし、キリスト教が伝来してから文字通りこのお祭りは禁止され、現在も公には認められていません。

最近では、アメリカの感謝祭が多くの国々で注目されています。このお祭りの始まりは、17世紀、とても辛くひもじい冬を生きのびたイギリス移民が、アメリカインディアン達と共に近くの森で獲った4羽の七面鳥を食べ、神のご加護に感謝したことに由来します。アメリカ人によって神聖に保護され守られている一連の伝統は、感謝の日々と関連しています。家族全員で教会に行き、礼拝の後お祭りの食卓を囲み、七面鳥を食べます。この日には必ずパレードがあり、人々は17世紀の衣服やインディアンの衣服を着て通りに出ます。

ヨーロッパには、ドイツの「オクトーバーフェスト」というビールの祭りがあります。この行事はミュンヘンのテレージエンヴィーゼ（テレーゼの緑地）で毎年行なわれます。すでに200年行なわれていて、16日間続きます。今年は179回目のオクトーバーフェストが9月21日から10月6日まで行なわれました。ミュンヘンの中央通りをお祭りの会場まで、手にベルを持った少女たちが飾りたてた馬に乗って行進します。バイエルン行政区長とミュンヘン市長が乗った四輪馬車も一緒に走ります。その後を飾り立てた馬車とビールを積んだ荷馬車が続きます。行進には、銃を持った隊列、俳優、楽団、伝統的なバイエルン地方の民族衣装を着た舞踊団もいます。人々は手に花輪と彩色した枝を持ちます。行進を伝統的なお芝居が盛り立てます。全てが荘重で、祝祭的です。

かつて、オクトーバーフェストは、全大陸からのお客さんをお呼びするために、お祭りを楽しみ、お祭り用に特別に醸造されたビールの品質を試し、民族舞踊のコンクールに参加するよう、バイエルンだけで行なわれていました。今ではお祭りはドイツ国境を越え、世界中のビール愛飲家達のお祭りに変わりました。モスクワでは、このお祭りはすでに6回目になります。モスクワのお祭りのプログラムには、バイエルン地方の歌と踊り、お祭りビールの樽開き、有名音楽家の演奏、伝統ビールのコンクールがあります。モスクワっ子はもうビールジョッキが描かれた看板や、ロシア語ではない「オクトーバーフェスト」になじんでいます。

イリーナ・ニコラエワ（モスクワ事務局）

振替用紙のメッセージから



- ◎「秋まつり京都」の繰越金の一部を寄付させて頂きます。「福島原発被災者支援」に有効にお使い下さい。
- ◎少しですが何かの役に立ちたいです。
- ◎京都で地元の方と共に筆と書のイベントを開催しています。これからも東北の事を思いつつ…応援します。
- ◎久しぶりの寄付送金になりましたが、いつも「福島」を思っています。
- ◎娘のエコー検査ではたいへんお世話になり、ありがとうございます。
- ◎宮尾さんの随筆は私の胸を深くえぐります。
- ◎何事も無かったように浮かれているかに思える世の中、その隣にある真実に目をつむらないでいたい、一人の市民として。福島の友を山野を日々に思う。
- ◎原発再稼働申請、東電の無神経体質に怒りを覚えます。福島にずーっと関わっている貴団体にささやかですが、支援を続けていきたいと思えます。
- ◎夏号の谷田部さんの寄稿から現地の様子が伝わりました。Teamめとば1周年で専門性の高い活動内容良く分かりました。ありがとうございます。
- ◎心ばかりですが、お役に立てて頂ければ嬉しいです。
- ◎少ししかできなくてごめんなさい。
- ◎福島の子ども支援に！
- ◎ごめんなさい、自分の生活に追われていました。また少しずつ応援していきます。
- ◎老人世帯ですが少しでも何かの役に立たせて下さい。
- ◎グランドゼロからたくさん事を学んでいます。ありがとうございます。
- ◎被災者の方々も辛いことでしょうか。がんばって下さい。私も耳へのダメージと足しびれなどでダメかと思いましたが。ようやく良くなって今日送金致します。またすぐ病院、毎日リハビリです。明日は主人の検査で立川へ出かけ

ます。

◎原発輸出、原発再稼働の日本社会のなかで、それでも「私の一番の希望たち」を追い求めていきたいと思います。

◎TVはオリンピックでうかかっているが、私は福島を忘れない。

◎JCFの一步一步を心から応援しています。

◎人々を結ぶ心の連帯いつも感じて！
◎子どもたちが笑顔いっぱいになるまで。

◎復興支援演奏イベント募金です。

2011年秋から年1回の開催を決めていたイベントは第3回を迎え徐々に参加者が増えました。中国音楽愛好家の皆さんが演奏費を払い、来聴者からも募金をいただいています。少しでも被災地の方に役立ちたいと、被災地に心を寄せる日として特別な一日となりつつあります。今回は125人の参加と120人の来聴者があり、30万4千円を原発震災被災者支援寄付と

してお送りします。原発被災者の方々には、先の見えない状況でさぞかしたいへんだと思いますが、私たちは常にそのことを肝に命じてしっかりと原発政策を見届けていかねばと思っています。これからも微力ながら応援しております。

◎福島支援として鎌田さんの生き方に共鳴して支援します。

◎9月2日付け毎日新聞に福島原発の記事があり怒りと情けない気持ちになりました。

◎なかなか応援できずすみません。福島の方々を遠くから応援しています。

◎いつもながらの少額の寄付ですがチエルノブイリやイラクの子どもたちの何かの足になればと思います。

◎子どもの支援法では外される認定地以外の健康診断をよろしく願います！チラシを送って下さい、広げます。

Здра в ст вуйт е!



信州大学医学部大学院で研究するリカ医師

緊迫のシリア情勢

神谷さだ子

JCFが支援して、4年間信州大学医学部大学院で白血病の遺伝子解析に取り組んでいたイラクの小児科医リカ医師が、この夏、半年ぶりにイラクから日本に戻ってきた。信州大学小児科の小池教授に指導を仰ぎながら、約2カ月間研究を続けた。JCFはリカ医師の遺伝子解析によってイラクの子どもの白血病の治療成績をあげたいと考えている。

リカ医師のイラク帰国予定の直前、8月21日、シリアの首都ダマスカスで化学兵器使用による大量殺戮が起こった。子ども、大人、おびただしい死者が並べられている映像が、インターネットのCNNニュースに流れた。日本のマスコミでは、まだ報道されなかった頃だ。

27日に帰国を計画していたリカ先生は、映像を見ながら、いつ米軍による空爆が始まるかと緊張していた。映像を見ながら、リカ先生のお母さんフダさんも、うつむいて首を振っている。「アラブはいつも戦争、戦争です」。化学兵器と言えば故フセイン大統領が、ハラブジャで5000人も住民を虐殺した事件がある。

帰国路はヨルダン経由で航空券を準備し、帰路のヨルダン入国ビザ申請を7月末にしたものの返事がなかった。もしかししたら、ビザが降りないかもしれない、とリカ先生は不安を抱いていた。シリアからの難民が、隣国のヨルダン、

こんにちは！



信州大学医学部大学院ラボで解析するリカ医師

イラクに脱出していて、ヨルダンでは慎重になっているらしい。緊急発行を夏休み前に申請していたので、一縷の望みを最後まで持とうと思った。大使館にも何度も連絡したが、母国からの入国許可は来ないという。

27日、遂にタイムアップ。午後7時からの40分あまりの旅行社とのやり取りは息もつけない凄まじさだった。最後はリカ先生の決断「ヨルダンで空港閉鎖になってしまったら、一番怖いことです」。急遽ヨルダン経由ではない航空券に変更・出発空港変更・松本からのタクシーも変更した。1週間後、リカ先生から信州大学の小池先生にメールが届いた。「無事に帰国しました」。ネット環境が悪いので、連絡ができなくなる、ということだった。論文の最終チェックを送ってきたのだった。

弟さん家族のいるクリスチャンが多く暮らすカラコシユで、がんセンターを立ち上げるために頑張るといふ安全な日本にいたほうが、私達にとっては安心だ。しかし、イラクの小児白血病の調査研究は、イラクの子ども達のために活かしたときっぱり言い切るリカ先生だ。いくつもの課題を抱えながら、混乱のイラクに帰った。

また、冬には次のステップのために日本に戻る予定だ。

Здравствуйте!

ハッピーチルドレン



金井さんの作品

ハッピーチルドレン（代表 金井恵津子さん）は保育士さんのサークルで今年で3年目を迎えました。1年に何回か講座を開催。パネルシアターで使用する紙絵の仕掛けの作り方を学び、自分で製作したり、講師を招いて演じ方のコツを学ぶ等、自身の保育技術を磨こうと勉強しています。また一般の方や子ども向けの講演も開催して、保育士さん自身も楽しみながら子どもたちも楽しみの中に誘いたいという開催者の強い思いがあります。

今回7月に講座を開催した際に、代表金井恵津子さんから自分で製作したポストカード、ブックカード（金井さんの作品はさみはほとんど使わず手でちぎって製作しています）、またサークル会員さんの布の手作り作品の売上げを寄付していただきました。ご自身は少額でと恐縮されていましたが、福島支援にしっかり使わせていただきます。

ありがとうございます。

今回は10月に軍手を使ったトコトコ人形作り講座（三匹のこぶた）を予定しているとのこと。興味のある方はJCF事務局までお問い合わせ下さい。

中澤啓子（事務局）

こんにちは！

イラクからスハッド姉妹来日



左からハディールさん、スハッドさん、野口佑芽さん

2003年のイラク戦争。大量破壊兵器もなく、国際テロ組織とも関係のなかったイラク。

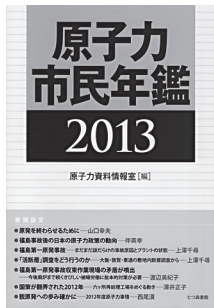
「大人たちはなぜ戦争するの？」
10歳だったスハッドが戦争を支持した大人たちに問いかけました。

東日本大震災が起こると、オーケストラのメンバーになつていたスハッドは日本のためのチャリティコンサートに参加。収益は石巻の相川小学校に届けられました。

イラク戦争から10年経ちましたが、最近またテロが増え、多くの犠牲者が出ています。治安が安定しないために復興も進みません。そんなイラクで立派に成長したスハッドと妹のハディールが日本にやって来て、福島や宮城を慰問しました。妹のハディールは17歳。彼女のバイオリンは日本人からプレゼント、スハッドのオーボエは鎌田理事長からのプレゼントです。

JCFの子どもサミットにも参加してスハッド姉妹が演奏を披露、郡山からサミットに参加した野口佑芽さんのホルンとの共演に会場から大きな拍手が湧きました。

原子力市民年鑑 2013 原子力資料情報室



原子力市民年鑑 2013
編者：原子力資料情報室
発行：七つ森書館
定価：4500 円＋税

Book

巻頭論文として「原発を終わらせるために」「福島事故後の日本の原子力政策の動向」など七本の論文を掲載。データブックとして日本の各原発サイトごとのデータ、テーマ別のデータを掲載。原子力の最新動向がわかる。

放射能は取り除ける 児玉龍彦



放射能は取り除ける
本当に役立つ除染の科学（幻冬舎新書）
著者：児玉龍彦
発行：幻冬舎
定価：860 円＋税

Book

福島第一原発事故による放射能汚染で、今も16万人が避難生活を続けています。放射能汚染はどう広がったか。放射線はなぜ危険か。本当に効果のある除染とは。森・水・土をいかに除染し、生活を再建するか。著者渾身の提言。

人はなぜ御用学者になるのか 島村英紀



人はなぜ御用学者になるのか
——地震と原発
著者：島村英紀
発行：花伝社
定価：1500 円＋税

Book

御用学者は「原子力ムラ」だけにいるのではない。東日本大震災と福島第一原発事故によって暴露された「原子力ムラ」と地震学者、地震学会の緊密な関係を通して、御用学者が生まれる社会的な要因を考える。

おいしい中東 サラーム海上

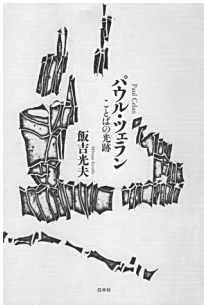


おいしい中東
オリエントグルメ旅 (双葉文庫)
著者：サラーム海上
発行：双葉社
定価：857 円＋税

Book

音楽評論家である著者が、中東——トルコ、レバノン、モロッコ、エジプト、イエメン、イスラエルの現地取材で出会った、おいしい料理、行っただお店、おいしいもの好きな人びと、現地の料理教室で習ったレシピなどを、旅のエッセイや写真とともに紹介する。

パウル・ツェラン ことばの光跡 飯吉光夫



パウル・ツェラン ことばの光跡
著者：飯吉光夫
発行：白水社
定価：3200 円＋税

Book

20世紀の最も苛酷な歴史を生き抜き、言葉だけを信じつづけ、狂気の果てにセーヌ川に身を投じた戦後ドイツ最高の詩人、パウル・ツェラン。その孤独な魂に寄り添い、詩想を追い求めてきた第一人者による研究の集大成。(本書帯より)

たとえ明日世界が減じようとも 藤原新也



たとえ明日世界が減じようとも
著者：藤原新也
発行：東京書籍
定価：1300 円＋税

Book

東日本大震災直後、著者が立ち上げた会員制ウェブサイト『CAM WALK』の中のひとつのコンテンツ『SHINYA TALK』を中心に大幅に加筆修正したものと、テーマに即して他の雑誌・新聞への寄稿、書き下ろしを加えたものがまとめられた。

Information

日本チェルノブイリ連帯基金（JCF）活動紹介

日本チェルノブイリ連帯基金（JCF）は1991年1月に設立されました。1986年4月26日に起きたチェルノブイリ原子力発電所の爆発事故の放射能被災地へ、主に医療を中心として支援活動を展開しています。

支援開始当初のベラルーシは、深刻な経済状況で、白血病など病気の子ども達は、十分に治療を受けることができませんでした。衛生管理もできなかったために、多くの子ども達は感染症などで亡くなっていました。JCFは、現地の医師らと話し合いながらプロジェクトを組み、信州大学などの医療従事者と共に着実な支援活動を続けてきました。

そして2004年、活動の支援先はイラクへも広がりました。イラクでは湾岸戦争以後に白血病が急増しています。長期にわたった経済制裁後、新たに起きた戦争で極端に物資が不足、子ども達の治療もままならず、多くのいのちが失われています。

2011年3月11日の東日本大震災、そして福島第一原発の事故により、東北地方のみならず広大な範囲で放射線災禍を受けました。JCFは事故直後から緊急医療支援、外部被曝線量測定、子ども達の診察プロジェクトを行ってきました。今後も子どもの検診や環境線量測定、食品汚染測定など、子ども達を被曝から守るための活動を続けます。



◆ JCF 会費振込口座

正会員年会費（1口）	10,000円
賛助会員年会費（1口）	3,000円
郵便振替口座番号	00560-5-43020
加入者名	日本チェルノブイリ連帯基金

◆ JCF / イラク支援振込口座

血液成分分析機購入、医師招聘研修、薬品購入	
郵便振替口座番号	00520-0-81078
加入者名	JCF / イラク支援



第 97 号

発行日 2013年9月26日

発行人 鎌田 實

発行所

日本チェルノブイリ連帯基金

イラスト題字 貝原 浩

イラスト 樫野ひかり

スタッフ 神谷さだ子

布山みな子

横内香苗

中澤啓子

坪根智美

協力 寺島仁美

J I M-N E T

風樹 光

印刷 電算印刷

■編集後記

2020年オリンピックの東京招致が決まった日、事務局のお昼休みはその決定への異議で盛り上がった。汚染水問題はじめ福島原発事故が何の解決の糸口も見えない中で、あり得ない決定だと…。昼食も終わりがけた頃、それまで沈黙していた Team めとぼの H 君が「僕…普通に嬉しかったです！」と首をすくめた。物心ついた時から日本にこういう晴れがましい出来事は無かった。是非見に行きたいという。そう言われると、事務局スタッフはみな東京オリンピックを「経験」している。ある福島在住の方は、「東京に決まって本当にホッとした」と言う。「もしダメだったら、きっと福島のせいだと言われるから」。オリンピック招致ひとつをとっても、自分のまわりだけでさえ様々な思いがあることに改めて驚く。(布山)

販売物紹介

Book

- ・「チェルノブイリからの伝言」
J C F 編 (オフィスエム) 1200 円

CD

- ・「小室等／ベラルーシの少女」
(8cm シングル盤) 1000 円
- ◆がんばらないレーベルCD
- ・「ふくしま・うた語り」
1500 円
- ・「ヴラダン・コチ／ふるさと」
2500 円
- ・「坂田明／ひまわり」
2500 円

ドクターかまちゃんの寒天ゼリー

1000 円

*販売物の詳細は事務局にお問い合わせ下さい。



●特定非営利活動法人

日本チェルノブイリ連帯基金 (J C F)

〒 390-0303

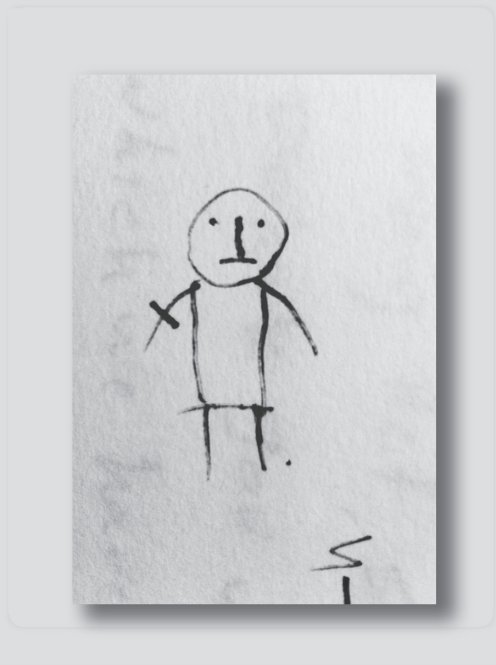
長野県松本市浅間温泉 2-12-12

TEL 0263-46-4218 FAX 0263-46-6229

E-mail asama@jcf.ne.jp

Website http://jcf.ne.jp





シリア

アハマッド君

シリアのアレッポから逃げてきたアハマッド君
お父さんの仕事もなく

そろそろ、シリアに戻るかなと

お父さんと様子を見にアレッポに帰りました。

しかし、家は破壊されて、

避難所となっている近くの学校で寝泊まり。

その時爆弾が爆発して腕をけがしてしまいました。

シリアの内戦は悪化するばかりです。